新撰國語讀本

昭和二版

卷十

375.9
Sa19
資料室

41520
教科書文庫
4
816
41-1932
200030
1886

資料室
375.9
Sa19

昭和七年二月十日
文部省檢定濟
中學校國語漢文科用

新撰國語讀本 卷十

（昭和二版）

文學博士 佐々政一 編
文學博士 武島又次郎
笹川種郎 補
杉敏介

熊沢峰
物ト蕉
三国
地蔵尺
代心

廣島大學圖書之印

佐賀大學教
26521
圖書

凡例

一、本書一部十卷は、故佐佐政一編「新撰國語讀本」を、最近改正された中學校教授要目に準據して新に補修したものである。

一、本卷は第五學年の後期用たるべきもので、中古以來の代表的作品を網羅し、僅ながら簡易な上古文を加へた。以て健全なる愚想、純美なる國民性を涵養し、心情を高雅ならしめ、常識を養成するに足るものがあると信ずる。

一、現代文を除く外は助動詞の「む」は「ん」に改めず、第九章「花月草紙」は學習上の一手段として、特に句讀點を施さなかつた。又、上古文は總て假名交りに書下し、奇古・難解に過ぎる語は往往平易な語に改めた。

一、所收の各篇は悉く著名の作品である。但し或作品はその全文を掲げることが出來ないで、拔萃したのもあり、一部分を削除したのもある。又文字・辭句も、普通教育上の見地から、多少原作と違へたところもある。此等は總てその篇の終に「による」の三字を添へたが、その責任は勿論補修者の負ふべきものである。

一、作品の採錄に就き快く承諾された各位に對して玆に敬意を表し、併せて種種の注意と助言とを與へられたことを感謝する。

目次

一　敕語並ニ奉答……（官　報）……四
二　修學の今昔……笹川臨風……八
三　友道論……綱島梁川……一四
四　神往の氣韻……夏目漱石……一八
五　わが國の繪畫……藤岡東圃……二八
六　狂文三篇……三五
一、鼠を責むる詞……大田南畝……三五
二、灸……石川雅望……三六
三、鍾馗の讃……石川雅望……三九
七　祭芳宜園大人墓文……村田春海……四〇
○　歌一首……村田春海……四三
八　菅笠日記抄……本居宣長……四四
九　花月草紙……松平定信……四八
一〇　羽衣（謠曲）……（謠曲大觀）……五四
一一　物のあはれ……吉田兼好……六一
一、花と月……六一
二、折節の移り變り……六二
一二　遷幸……（增鏡）……六六
一三　いさよふ月……阿佛尼……七四
一四　菅公の左遷……（大鏡）……八二
一五　大和民族の根本性……五十嵐力……八八
一六　日本文藝の一特質……（醒雪遺稿）……九七

上代文選

○　萬葉集に就て……島木赤彥……一〇九
一　たぎつ河內（和歌）……（萬葉集）……一一六
○　古事記と國家的精神……久松潛一……一二三
二　須賀宮……太安麻呂……一二八
三　倭建命の東征……太安麻呂……一三二

一 敕語並ニ奉答

昭和元年十二月二十八日午前十時三十分宮中ニ於テ踐祚後朝見ノ儀ヲ行ハレ左ノ敕語アラセラル

朕皇祖皇宗ノ威靈ニ賴リ萬世一系ノ皇位ヲ繼承シ帝國統治ノ大權ヲ總攬シ以テ踐祚ノ式ヲ行ヘリ舊章ニ率由シ先德ヲ聿修シ祖宗ノ遺緒ヲ墜ス無カランコトヲ庶幾フ

惟フニ皇祖考叡聖文武ノ資ヲ以テ天業ヲ恢弘シ內文敎ヲ敷キ外武功ヲ耀カシ千載不磨ノ憲章ヲ頒チ萬邦無比ノ國體ヲ鞏クセリ皇考夙ニ心ヲ養正ニ宅キ廼チ志ヲ繼明ニ尙クス不幸中道ニシテ聖體ノ不豫ナル朕儲貳ヲ以テ大政ヲ攝ス遽ニ登遐ニ遭ヒテ哀痛極リ罔シ但皇位ハ一日モ之ヲ曠クスヘカラス萬機ハ一日モ之ヲ廢スヘカラス哀ヲ銜ミ痛ヲ懷キ以テ大統ヲ嗣ケリ朕ノ寡薄ナル唯兢業トシテ負荷ノ重キニ任ヘサランコトヲ之レ懼ル

輓近世態漸ク以テ推移シ思想ハ動モスレハ趣舍相異ナルアリ經濟ハ時ニ利害同シカラサルアリ此レ宜ク眼ヲ國家ノ大局ニ著ケ擧國一體共存共榮ヲ之レ圖リ國本ニ不拔ニ培ヒ民族ヲ無疆ニ蕃クシ以テ維新ノ宏謨ヲ顯揚センコトヲ懋ムヘシ

今ヤ世局ハ正ニ會通ノ運ニ際シ人文ハ恰モ更張ノ期ニ膺ル則チ我國ノ國是ハ日ニ進ムニ在リ日ニ新ニスルニ在リ而シ

テ博ク中外ノ史ニ徵シ審ニ得失ノ迹ニ鑒ミ進ムヤ其ノ序ニ循ヒ新ニスルヤ其ノ中ヲ執ル是レ深ク心ヲ用フヘキ所ナリ」夫レ浮華ヲ斥ケ質實ヲ尚ヒ模擬ヲ戒メ創造ヲ勗メ日進以テ會通ノ運ニ乘シ日新以テ更張ノ期ヲ啓キ人心惟レ同シク民風惟レ和シ汎ク一視同仁ノ化ヲ宣ヘ永ク四海同胞ノ誼ヲ敦クセンコト是レ朕カ軫念最モ切ナル所ニシテ丕顯ナル皇祖考ノ遺訓ヲ明徵ニシ丕承ナル皇考ノ遺志ヲ繼述スル所以ノモノ實ニ此ニ存ス有司其レ克ク朕カ意ヲ體シ皇祖考暨ヒ皇考ニ效セシ所ヲ以テ朕カ躬ヲ匡弼シ朕カ事ヲ奬順シ億兆臣民ト俱ニ天壤無窮ノ寶祚ヲ扶翼セヨ

尋テ內閣總理大臣左ノ通奉答セリ

臣禮次郎誠惶誠恐伏シテ言ス

大行天皇猝ニ晏駕アラセラレ臣民憂懼哀痛措ク所ヲ知ラス

今

叡聖文武ナル天皇陛下大統ヲ繼カセラレ茲ニ彝訓ヲ下シ給ヒ祖宗ノ德業ヲ繼述シ國民ノ慶福ヲ增進シ以テ先朝ノ宏謨ヲ發揚センコトヲ宣示セサセ給ヒ世局ノ進運ヲ察シ時勢ノ趣向ニ鑒ミ國民ノ嚮フヘキ所ヲ昭示セサセ給フ聖慮深遠臣等感激ノ至リニ勝ヘス日夜惕厲一意明訓ヲ奉體シ報效ノ誠ヲ致シ以テ

聖旨ニ答ヘ奉ランコトヲ誓フ臣禮次郎誠惶誠恐頓首謹テ奏ス

(官報號外「宮廷錄事」ニヨル)

二　修學の今昔

昭代の餘惠、遐邇に普くして、庠序設立の夥多、實に前に空し。獨り小學の僻陬に於て見るべきのみならず、輓近中等の黌舍到る處に設けられて、一縣のうち少なくも十、多きは百を以て數ふ。然り而して、圖籍の刊行歳と與に盛んに、(一)汗牛充棟、(二)四庫、(三)五車のうち滿滿たり。巍然たるその黌舍、教師その人に乏しからず、載籍機器より遊戯の具に至るまで、擧げて而して備はれり。圖籍の刊して出づるもの、古人これを門外不出と標榜し、什襲珍藏して措かざりしもの、僅僅幾十錢を投じて而して手にすべし。盛んなるかな文運の發展したるや。今の學徒にして文教興隆の恩澤に浴せんとするものは、宜しく古人修學の難を顧みて奮起すべきなり。

（一）其爲レ書、處則充二棟宇一、出則汗二牛馬一。（柳宗元）
（二）唐の玄宗の時、長安と洛陽とに各〻四つの庫を立て、經・史・子・集の四部に分つた書物を之に收藏した。
（三）惠施多方、其書五車。（莊子）

螢（四）を盛りて書を照らし、經（五）を帶びて耕耨す。古人好學の意、まことに尚むべし。夏（六）禹の寸陰を惜しめる、王（七）通の六歳衣を解かざる、後人聽いて以て起つべし。帝應神の朝典籍始めて扶桑に入りてより、文教漸く起り、厩戸の博識、帝弘文の好學、時にこれありしといへども、修學の徒もとより萬に一なし。大寶の令、大學・國學の設ありといへども、廣く下民に及ぶ能はず。朝廷圖書寮の建置ありといへども、藏するところは謄寫の書のみ。太宰府の學校管するところ六（八）國なりしも、藏するところは奈良朝に至るまで僅に五（九）經に過ぎざりしといふ。博（一〇）士官の書閣は卽ちこれ石室・金匱、容易く他の窺ふを許さず。これ菅（一一）江二家の世業たりし所以なり。石（一二）上宅嗣家に藏書館の設ありしといへども、一家の東觀のみ、祕閣のみ。書を獲るの難、豈に少少ならんや。

（四）晉の車胤の故事。
（五）魏の常林の故事。
（六）大禹聖人、乃惜二寸陰一。（陶侃）
（七）支那の隋の代の大學者。
（八）筑・豐・肥・日向・壹岐・對馬。
（九）易經・書經・詩經・春秋・禮記。
（一〇）大學寮や太宰府に置いた官。
（一一）菅原・大江の二家。
（一二）奈良朝時代の學者。天應元年（一四一）歿、年五十三。

夫れ印版の古きは、女帝稱德の神護慶雲四年造る所の百萬塔中の「陀羅尼經」を推すべし。されど圖籍の刊行は、容易の業にあらずして、多くは筆寫を以て傳へたり。室町幕府の末、三條西實隆は手づから「史記」を寫し、又子弟に課して「六經」「史記」「漢書」等を謄寫せしめしといふ。一字版(木版の活字)の輸來に至つては、實に文祿以後にかかる。文祿二年一字版を以て「古文孝經」を刊す。その後慶長元年「蒙求」の印行あり。この時に當りて、好學の天子帝後陽成ありて、慶長二年錦繡段の印行を督し給ひ、同四年には「日本紀」神代卷の敕版あり。又德川家康の大いに文敎を重んずるありて、慶長年間には「孔子家語」「東鑑」「周易」等の印行あり。尋で銅版活字の「大藏一覽」刊せらる。これよりして後、彬彬たる文運頓に開け、侯伯の家も亦大部の舶載書籍を刊し、文學旺然として覽るべし。然れども、固より今の活字印行の易きに

(一)紀元一四三〇年。
(二)學者。仕へて内大臣に任ぜられた。天文六年(一五七)歿、年八十三。
(三)後陽成天皇の御代の年號。(一五八一—一五九六)
(四)後陽成天皇の御代の年號。(一五九六—一六一五)
(五)二卷。僧天隱の撰。唐・宋・元の三代の七言絶句の佳作詩集。

比すべからざるなり。

師を得て之に就くの道、亦實に難かりき。吉野朝の頃、筑紫の人、千里を遠しとせずして、衣の袖漬す常陸國に來り、四書五經の講筵に侍せんとす。その「孟子」を聽くや、豆三斗、日に一握を糧とす。既にして「易」に及んで糧盡く。乃ち鄕に歸り、更に資を得て又聽講を紹ぎしと云ふ。野の足利學校は足利季世に於ける文學の一穗燈、遊び學ぶもの四國・九州も遠しとせず。薄暮聖像の前に踞して、學徒文を講ずるの狀、心ある行旅をして崇敬の思あらしむ。

江村專齋は、永祿八年、卽ち松永久秀の大樹義輝を弑したる年に生れ、寛文四年、卽ち四代將軍家綱の世に歿したる人なり。その「老人雜話」に記す所によれば、少年の時、洛中に四書の訓讀を敎ふる人なく、乃ち僅に索めて山科卿に從ひしが、「孟子」に至りて、辭を他に貸し

(六)五山の僧の手に成る「碧山日錄」に記す所であるが、その名は記してない。
(七)正親町天皇の御代の年號。(一五七〇—一五七三)
(八)後西天皇の靈元天皇との二代に亙る年號。(一六五五—一六五七)
(九)大學・中庸・論語・孟子。

たるに藉りて又教へざりしも、實は知らざりしなりと云ふ。然れども、斯かる際に惺窩(一)は宋學を唱へ、羅山(二)は力學して、幕府の叔孫通(三)となれり、羅山の「棠陰比事」の質疑に答へて祇園の祭を觀ざりしが如き、除夜「通鑑綱目」を講じて諄諄たりしが如きは、倶に傳へて後代の美談となす。

蘭學の始めて傳はれる、講ずるの徒苦辛備さに至れり。良澤(四)・甫周(五)・玄白(六)の「解體新書」を譯する、稿を改むること十一、年を經る前後四なりと云ふ。維新の前後、四方の文明を輸來せんとするもの、概ね困學して而して後曙光始めて至り、今日到る處容易に外書を講じ、外學を學ぶを得るなり。

保己(七)一檢校垂髫明を喪ひ、而して苦學し、人に絶したる精力を以て、和學(八)所に長となり、一千二百七十三部の「羣書類從」、二千一百三部

(一)藤原氏。儒者。元和元年歿。
(二)林氏。幕府の儒官。惺窩の門人。明暦三年（一六五七）歿、年七十五。
(三)支那の漢の學者。高祖に説いて朝儀を起さしめた。
(四)前野氏。蘭醫。享和三年（一八〇三）歿、年八十一。
(五)桂川氏。蘭醫。文化六年（一八〇九）歿、年五十九。
(六)杉田氏。蘭醫。文化十四年歿、年八十五。
(七)塙氏。國學者。文政四年（一八二一）歿、年七十六。
(八)寛政五年（一七九三）塙保己一の創設した學舍。
(九)春秋時代の魯の歴史家。
(一〇)漢代の歴史家。

の「續羣書類從」を編して、後生その裨補を得る甚だ多し。左丘明(九)と、なりて「左傳」を著し、司馬(一〇)遷刑せられて「史記」を作る。古人の奮勵以て少年立志の基となすに足れり。

獨のグーテンベルヒ(一一)一たび金屬活字を發明して、歐洲の文明斐然章をなし、明治の世本木昌造(一二)これを傳へて、方今その恩に浴す。書あり、累累として泰嶽に比すべく、讀まんと欲して得られざるもの殆どなし。然るに、獨り怪しむ、今の學徒何が故に逡巡して而して放逸に奔らんとはする。

語を學生諸子に寄す。書あり、師あり、學の成ること極めて易し。逡巡する勿れ、放逸に奔る勿れ。宜しく古人力學の迹に鑑みて、一向專念すべきなり。（笹川臨風）

(一一)Johannes Gutenberg.（1394—1468）活版印刷術の發明者。
(一二)活字製造の元祖。長崎の人。明治八年歿、年五十三。

笹川臨風　歴史家。文學博士。東京帝國大學文學部出身。現に東洋大學教授。駒澤大學教授。

三　友道論

友道に最も忌むものは猜忌なり、嫉妬なり。友なるものは多くは自己と主義・理想・好尚・信仰を同じうするもの、而してその知識・才能に於ても甚しき懸隔なきを常とす。げに友は第二の我なり。隨つて、起り易きものは嫉妬なり。而も一たび嫉妬の情生ぜんか、最早貴き友情を味はふの資格なきものと墮せるなり。

我を最もよく知るものは友なり。我等は一切の自家祕密を打明け得るものを得て、始めて解脱す、超我す。人は知音の爲には身命をも獻げて辭せざらんとするもの、而して此の如き知音は友あるのみ。管仲・鮑叔の例以て徵すべし。故に自己の弱點・祕密を打明け得ざるものは、眞友を得る能はず。眞我を打出し、肺肝を披瀝して、相照らすものにあらざれば、友ある能はず。友を得る第一要件は、公明に我を打明くる勇氣なり。自ら缺陷・弱處を掩ひ包み、恰も栗のいがの如く、ひしと護身の劒戟に身繕ひして、さて友と交はるものあり。かくの如くして友を得むこと難いかな。

されど、自家短處を暴露するは友に交はる一要件なりといへども、こは他の最大要件と相須ちての自然の結果たるを要す。眞善美の理想に向上せんとする熱情に相合し、この美しき心意氣に肝膽相許して、自他提撕して精進する一事これなり。この高尚なる結合ありて、始めて自他その弱點短處を打明け合うて、而も相同情し、相切磋して進むが故に、その醜處暗處の疵は高尚なる理想の光もて和げられ、言ひ難き向上の歎の涙をもて溫めらる。かかる友道に於ては、自他その短處・弱處を知ることが、却て同情・發憤の動力となる

なり。

實利主義の時代、今の人は何事をなすにも資本を卸すが如き心得にてなすなり。その求むるもの、利殖なり、繁榮なり、厚生利用なり。今の世には、何ぞ熱情をもて友を求むるものの少なき。世は澆漓・輕薄の流に漂ひて、かかる美しき熱情をも失へるか。嗚呼、友は人生最高の無價寶なり。花の前、月の下の假初に結びし友垣だに嬉しきものなるを、(一)金蘭の友の如何に貴きものなるぞ。

人は子孫に生き、又は事業に生くといふ。されど、眞に生くるは友のみ。眞の我はただ友の中にありて生き、榮え、光輝を放つ。嘗て我が友に、病を得て瞑せんとするに臨み「我が志を成すものは君なり。我は君によりて生くべし。君それ自愛せよ。」との一語を遺して逝きしものあり。今は憶ひ出づるだに切切の情に堪へずといへども、友の

(一)二人同レ心、其利斷レ金。同心之言、其臭如レ蘭(「易經」)

眞意義を教へたるもの、實に此の一語なりと、我は常に思ふなり。

道の友、理想の友のみ眞友なり。されば、(二)ミルが、「善人を外にして眞心より自由を愛するものなし。」と言ひし如く、吾人は「善人を外にして、眞心より友を愛するものなし。」と言はんとす。惡人は眞の我卽ち理想を有せず、隨つて眞の友あることなし。自家心中に道を有するもの、眞善美の理想を有するものにして、始めてよく友道の大義を盡すべし。同じ理想の佛前に跪禮するものにして、同氣同聲、相呼應感孚することを得べきなり。されば單に嗜好を同じうし、職業を同じうし、地位・階級を同じうし、又は利益・快樂を同じうするのみにては、友道成らず。友道は倫理・道德を根柢とす。友を得る、豈に容易ならんや。(綱島梁川著「梁川全集」による)

(二)John Stuart Mill. (1806—1873) 英國の經濟學者・論理學者。

綱島梁川　倫理學者。名は榮一郎。岡山縣の人。早稲田大學出身。明治四十年歿、年三十五。

四　神往の氣韻

夕暮の机に向ふ。障子も襖も開け放つ。宿の人は多くもあらぬ上に、家は割合に廣い。余が住む部屋は、多くもあらぬ人の人らしく振舞ふ境を、幾曲りの廊下に隔てたれば、物の音さへ思索の煩ひにはならぬ。今日は一しほ靜かである。主人も、娘も、下女も、下男も、知らぬ間に、われを殘して、立ちのいたかと思はれる。立ちのいたとすれば、唯の所へ立ちのきはせぬ。霞の國か、雲の國かであらう。或は雲と水とが自然に近づいて、舵を取るさへ懶き海の上を、いつ流れたとも心づかぬ間に、白い帆が雲とも水とも見分け難き境に漂ひ來て、果ては帆みづからが、いづこに己を雲と水とより差別すべきかを苦しむあたりへ――そんな遙かな所へ立ちのいたと思はれる。それ

*四大謂ハフ人身ヲ。攬ヲ外地水火風ノ四大ヲ、シテスニ成ニ內身四大ヲ。而（圓覺經）

でなければ、卒然と春のなかに消え失せて、これまでの四大が、今頃は目に見えぬ靈氣となつて、廣い天地の間に、顯微鏡の力を藉るとも、些の名殘を留めぬやうになつたのであらう。或は雲雀に化して、菜の花の黃を鳴き盡したる後、夕暮深き紫のたなびくほとりへ行つたかも知れぬ。又は永き日をかつ永くする虻のつとめを果したる後、蕊に凝る甘き露を吸ひそこねて、落椿の下に伏せられながら、世を香ばしく眠つてゐるかも知れぬ。とにかく靜かなものだ。

空しき家を空しく拔ける春風の、拔けて行くは迎へる人への義理でもない、拒むものへの面當でもない。おのづから來りて、おのづから去る、公平なる宇宙の意である。掌に顎を支へたる余の心も、わが住む部屋の如く空しければ、春風は招かぬに遠慮もなく行拔ける。

踏むは地と思へばこそ、裂けはせぬかとの氣遣ひも起る。戴くは天と知る故に、稻妻の蜂谷(こめかみ)に震ふ怖も出來る。人と爭はねば一分が立たぬと浮世が催促するから、火宅の苦は免れぬ。(中略)握る名と奪へる譽とは、小賢しき蜂が甘く釀すと見せて、針を棄て去る蜜の如きものであらう。所謂樂しみは物に著するより起るが故に、あらゆる苦しみを含む。但詩人と畫客なるものあつて、飽くまで此の待對世界の精華を嚼んで、徹骨徹髓の清きを知る。霞を餐し、露を嚥み、紫を品し、紅を評して、死に至つて悔いぬ。彼等の樂しみは物に著するのではない。同化して其の物になるのである。其の物になり濟ました時に、我を樹立すべき餘地は、茫茫たる大地を極めても見出し得ぬ。自在に泥團を放下して、破笠裏に無限の青嵐を盛る。いたづらに此の境遇を拈出するのは、敢て市井の銅臭兒を鬼嚇して、好んで高

*William Wordsworth.
(1770—1850)
イギリスの詩人。

く標置するが爲ではない。ただ這裏の福音を述べて、緣ある衆生を麾くのみである。有體に云へば、詩境と云ひ、畫界と云ふも、皆人人具足の道である。春秋に指を折り盡して、白頭に呻吟するの徒と雖も、一生を回顧して、閲歷の波動を順次に點檢し來る時、嘗ては微光の臭骸に洩れて、吾を忘れし拍手の興を喚び起す事が出來よう。出來ぬと云はば、生甲斐のない男である。

されど、一事に卽し、一物に化するのみが、詩人の感興とは云はぬ。或時は一瓣の花に化し、或時は一雙の蝶に化し、あるはウオーズウオースの如く、一團の水仙に化して、心を澤風の裏に撩亂せしむる事もあらうが、何とも知れぬ四邊の風光にわが心を奪はれて、わが心を奪へるは那物(なにもの)ぞとも明瞭に意識せぬ場合がある。或人は天地の耿氣に觸るると云ふだらう。或人は無絃の琴を靈臺に聽くと云

ふだらう。又或人は、知り難く解し難きが故に、無限の域に彷徊して、縹渺の巷に彷徨すると形容するかも知れぬ。何と云ふも皆その人の自由である。わが唐木の机に憑りてぽかんとした心裏の狀態は、正にこれである。

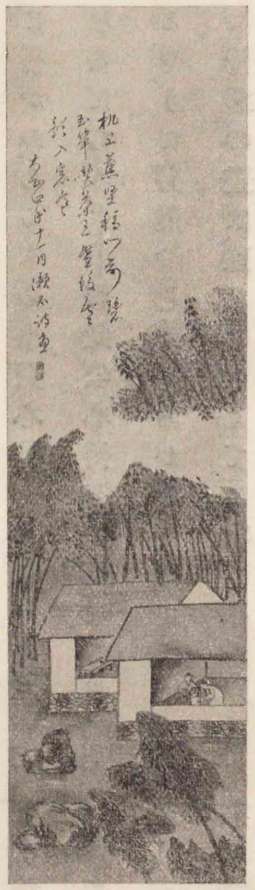
余は明かに何事をも考へて居らぬ。又は慥に何物をも見て居らぬ。わが意識の舞臺に著しき色彩を以て動くものがないから、われは如何なる事物に同化したとも云へぬ。されども、われは動いて居る。世の中に動いても居らぬ、世の外にも動いて居らぬ。只何となく動いてゐる。花に動くにもあらず、鳥に動くにもあらず、人間に對して動くにもあらず、只恍惚と動いてゐる。

強ひて說明せよと云はるるならば、余が心は只春と共に動いて居ると云ひたい。あらゆる春の色、春の風、春の物、春の聲を、打つて固

めて、仙丹に練上げて、それを蓬萊の靈液に溶いて、桃源の日で蒸發せしめた精氣が、知らぬ間に毛孔から染込んで、心が知覺せぬうちに飽和されて了つたと云ひたい。普通の同化には刺戟がある。刺戟があればこそ愉快であらう。余の同化には、何と同化したか不分明であるから、毫も刺戟がない。刺戟がないから、窈然として名狀し難い樂しみがある。風に揉まれて上の空なる波を起す、輕薄で騷騷しい趣とは違ふ。目に見えぬ幾尋の底を、大陸から大陸まで動いてゐる潢洋たる蒼海の有樣と形容する事が出來る。只それ程に活力がないばかりだ。然し、そこに却て幸福がある。偉大なる活力の發現は、此の活力がいつか盡き果てるだらうとの懸念が籠る。常の姿にはさういふ心配は伴なはぬ。常よりは淡きわが心の、今の狀態には、わが烈しき力の銷磨しはせぬかとの憂を離れたるのみならず、常の

心の可もなく不可もなき凡境をも脱却してゐる。淡しとは單に捕へ難しと云ふ意味で、弱きに過ぎる處を含んでは居らぬ。冲融とか澹蕩とか云ふ詩人の語は、最も此の境を切實に言ひ了せたものだらう。

此の境界を畫にして見たら何うだらうと考へた。然し、普通の畫にはならないに極まつてゐる。我等が俗に畫と稱するものは、只眼前の人事風光を、有りの儘なる姿として、若しくは之をわが審美眼に漉過して、繪絹の上に移したものに過ぎぬ。花が花と見え、水が水と映り、人物が人物として活動すれば、畫の能事は終つたものと考へられてゐる。もし此の上に一頭地を抜けば、わが感じたる物象を、わが感じたる儘の趣を添へて、畫布の上に淋漓として生動させる。或特別の感興を、己が捕へたる森羅の裏に寓するのが、此の種の技



夏目漱石筆蹟

術家の主意であるから、彼等の見たる物象觀が明瞭に筆端に迸つて居らねば、畫を製作したとは云はぬ。己はしかじかの事をしかじかに觀、しかじか感じたり、その觀方も感じ方も、前人の籬下に立ちて、古來の傳説に支配せられたるにあらず、しかも最も正しくして、最も美しきものなりとの主張を示す作品にあらざれば、わが作と云ふを敢へてせぬ。

此の二種の製作家に主客深淺の區別はあるかも知れぬが、明瞭なる外界の刺戟を待つて始めて手を下すのは、雙方とも同一である。されど、今わが描かんとする題目は、さほどに分明なものではな

い。あらん限の感覺を鼓舞して、之を心外に物色した所で、方圓の形、紅綠の色は無論濃淡の陰、洪纖の線を見出しかねる。わが感じは外から來たのではない。たとひ來たとしても、わが視界に横たはる一定の景物でないから、之が原因だと指を擧げて明かに人に示す譯に行かぬ。あるものは只心持である。此の心持をどう現したら畫になるだらう。――否此の心持を、如何なる具體を藉りて、人の合點するやうに髣髴せしめ得るかが問題である。

普通の畫は、感じはなくても物さへあれば出來る。第二の畫は、物と感じと兩立すれば出來る。第三に至つては、存するものは只心持だけであるから、畫にするには、是非とも此の心持に恰好なる對象を選ばなければならぬ。然るに、此の對象は容易に出て來ない。出て來ても、容易に纏まらない。纏まつても、自然界に存するものとは丸

(一) Mood. 樣式。

(二) 支那宋代の人。名は同。號は笑笑先生。書道に通じ、又善く竹を畫いた。

で趣を異にする場合がある。隨つて、普通の人から見れば畫とは受取れない。描いた當人も、自然界の局部が再現したものとは認めて居らぬ。只感興のさした刻下の心持を幾分でも傳へて、多少の生命を悦惚し難きムード(一)に與ふれば、大成功と心得てゐる。古來から、此の難事業に全然の績を收め得たる畫工が有るか無いか知らぬ。或點まで此の流派に指を染め得たるものを擧ぐれば、文(二)與可の竹である、雲(三)谷門下の山水である、下つて大(四)雅堂の景色である、蕪(五)村の人物である。泰西の畫家に至つては、多く眼を具象世界に馳せて、神往の氣韻に傾倒せぬ者が大多數を占めてゐるから、此の種の筆墨に物外の神韻を傳へ得るものは果して幾人あるか知らぬ。

（夏目漱石著「草枕」による）

(三) 室町時代の畫僧雪舟。號して雲谷軒といふ。備中の人。水墨の畫にすぐれてゐた。永正三年（一五〇六）歿、年八十七。

(四) 池野氏。京都の人。南宗畫の開祖。安永五年（一七七六）歿、年五十四。

(五) 本姓谷口。與謝氏を用ひた。俳人兼れて畫を善くした。天明三年（一七八三）歿、年七十

夏目漱石　英文學者・小說家。名は金之助。東京の人。東京帝國大學文學部出身。同大學・第一高等學校の講師。後、東京朝日新聞社に入つた。大正五年歿、年五十。

五　わが國の繪畫

日本畫と西洋畫とは漸次混融して、その區劃も明瞭ならざるに至るが如しといへども、この兩者の純粹なるものを比較すれば、各自の特色は猶甚だ顯著なり。啻に絹紙と彩具との相違のみならんや、その用意・筆法等に於て皆然り。彼にあつては藝術は科學と並行し、理性は想像の銜となりて、遠近・明暗力めて自然に背かざらんことを期し、此にあつては文化の精神的方面獨りまづ進み、筆を揮ふもの感興に乘じて腦裏の印象を瀉ぎ出す。彼は色彩を旨とし、此は描線を重んじ、彼は實相の通りに空氣の色をも漏らすことなく、此は主體の外は生地の儘に存す。一は濃豔、一は瀟洒、一は輪奐たる樓臺に顯官が客を引く如く、一は幽閑なる茅屋に高士が梅を愛する

(一)用明天皇の皇子。推古天皇の太子。推古天皇の二十九年(一三八)薨去、御年四十九。

(二)畫家。巨勢家の開祖。清和・陽成・光孝・宇多・醍醐の五朝に歷仕して大納言に至る。

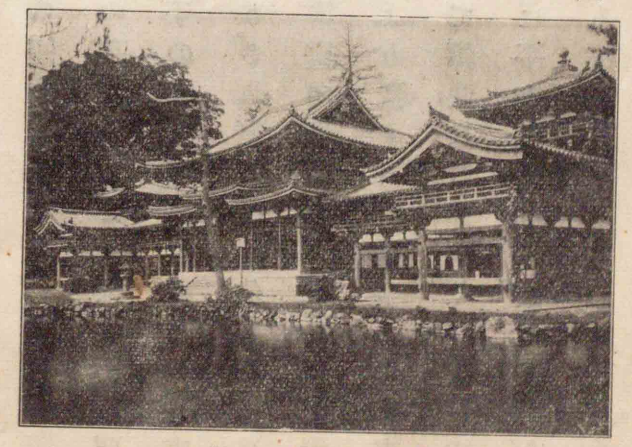
(三)治安三年(一六八三)藤原道長の建立したもの。

(四)承保二年(一七五)白河天皇の勅願によつて建立されたもの。

に似たり。此等の差別は蓋しその初よりして然りしにあらず、各自獨立したる歷史が漸次に養成したるものにして、今はた兩洋交通の歷史によりて、これを合一せんとする傾向あるなり。

わが國の文藝に於ける佛敎の感化の甚深なることは多言を要せず。眞の美術の歷史といふは聖德太子(一)の佛敎興隆に始まり、爾來進步劇甚、以て偉大なる奈良朝に及べり。されどこの時代も、彫塑に於てこそ千古無比の名を博すべけれ、繪畫の步調は未だこれに伴なはず、平安朝に巨勢(二)金岡が出でし頃より、漸く丹靑全盛の世は來れるなり。而して奈良朝の彫塑がなべて佛像なるが如く、平安朝の繪畫も概して佛畫の外に出でず。按ふに平安朝の如く形式美を偏重したる時代は他に類例を見ず。佛敎も亦形相の具足によりて、內心の信仰に近づくべしとしたり。法成寺(三)・法勝寺(四)の如き、今廢墟をだ

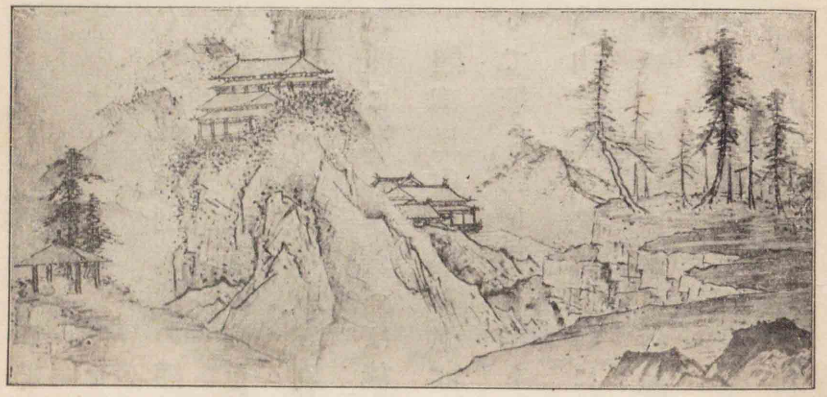
に存せざれども、金堂・講堂、七寶莊嚴、天を摩する大塔、虹と曳く廻廊、すべて一代の工を盡しし狀態は歴史の傳ふるところ、今に存する鳳凰堂(一)を見てもその一端を覗ふべし。香煙徐に薫じて幢幡を掠め、蓮華頻りに散つて轉讀にたぐふ。龍頭の舟は池上に浮んで笙鼓月に冴え、頻伽の袖は庭前に飜りて舞容風に堪へず。恰もこれ坐ながらなる極樂淨土、紫雲の來迎を待たずして、身は既に汚濁世界を離る。かくの如き場に用ふる畫像なれば、彩華炫耀、丹碧映射、その色は珊瑚・水晶を碎き、その線は黃金の箔を切り、或は慈悲圓滿、或は忿怒破邪、十分



鳳凰堂

(一) 京都府久世郡宇治町にある平等院。もと源融の別莊であつたが、陽成天皇の行宮、宇多・朱雀兩天皇の離宮となり、又藤原道長の山莊となり、その子頼通は遂に佛像を安置して寺とした。

(二) 本卷二七頁既出。



雪舟筆

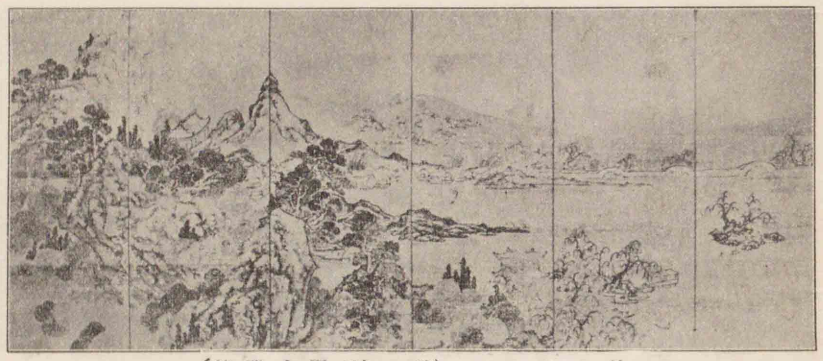
に濃く、飽くまで鮮かに、精を窮め、微を闡きて、後世の乾枯・洒脫なるものとは全く撰を異にしたること、想見するに足る。

鎌倉時代の繪卷物も亦日本繪畫の精華なり。平治物語繪卷等は源平鬪爭の慘狀を寫し、圓光大師畫傳等は新佛敎勃興の機運に隨ふ。いづれも時代の反映にして又不朽の逸品たるを失はざれども、內容・外形共に根本の變化を受けたるは、實に東山時代の繪畫にして、僧雪舟(二)等その代表者たり。この革新は禪宗の提撕によりて成り、鎌倉時代にこの宗の傳來せし

より、漸く養ひ來れる勢力のここに項點に達したるものにして、香・茶の技と榮枯を共にせり。抑〻平安朝の佛寺を去つて禪刹の門をくぐるや、彼此別天地の感なくんばあらず。結跏趺坐して寂靜の境に入れば、物の美醜も眼を遮らず。一旦その道に悟入すれば、經典・佛像何の要かあらん。教外別傳といひ、以心傳心といひ、精神を主として形體に泥まず。譬へば、能樂に何等の背景を設けずして、しかも能く雲煙萬里の情趣を偲ばしむるが如し。繪畫もこれに同じく、色を棄てて筆に託し、巧を抛ちて氣を驅り、蒼枯にして恬澹、破墨一掃して遠山を產み、禿筆數行にして樹石を刻む。一見すれば兒戲、熟視すれば神工、益〻味はうて益〻趣あり。恍惚として吾、我を忘る。卽ちこれ東山時代の特色にして、流風餘韻延いて近代に及べり。

桃山時代は豪華の氣一世を蓋ひ、繪畫も稍移りて雄大・穠麗の風

（一）狩野正信を祖とする日本畫の一派。正信は足利義政に仕へた人。
（二）住吉慶恩を祖とする日本畫の一派。慶恩は建仁・元久頃の人。その子孫の具慶に至り、狩野家と相並んで江戸幕府の御畫師となつた。
（三）尾形氏。光琳派の祖。享保元年（一七一六）歿、年五十六。
（四）英氏。享保九年歿、年七十三。
（五）菱川派の祖。元祿七八年頃歿。
（六）本卷二七頁既出。

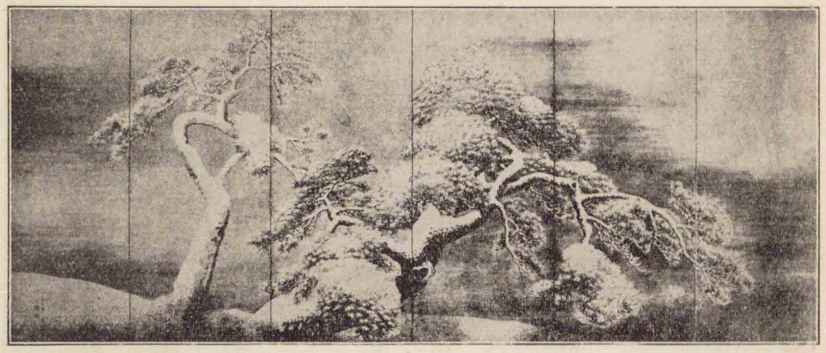


餘杭幽勝（池野大雅筆）

を喜べども、未だ東山の根據を衝くに及ばざりき。江戸時代に至つて、幕府の消極なる方針は更にその規模を縮めて、枯淡の域に歸らしめ、門閥の貴に誇れる狩野（一）・住吉（二）も先人の糟粕を嘗むるのみ。元祿の盛時には、裝飾に傾ける光琳（三）、滑稽の才ある一蝶（四）（五）あり。菱川師宣以來の浮世繪が、時勢粧を寫して、山水・花鳥以外に題目を求めたるは、最も注意すべしといへども、鄙俗に流れて遂に高尙なる趣味に應ずる能はず。大雅（六）等の文人畫は、東山の繪畫に比すれば、全然別種のものに屬すれども、匠氣を忌み、形似を疎にし、氣

（一）圓山氏。圓山派の祖。丹波の人。寛政七年（一七九五）歿、年六十三。
（二）田中氏。尾張の人。文政六年（一八二三）歿。
（三）菊池氏。名は武保。明治十一年（一八七八）歿、年九十一。

藤岡東圃　國文學者。文學博士。名は作太郎。石川縣の人。東京帝國大學文學部出身。第三高等學校教授・東京帝國大學助教授に歴任。明治四十三年歿、年四十一。



雪松（圓山應擧筆）

韻生動を以て第一義とするところは卽ち相似たり。應擧等の寫生畫は自然の摸寫に力めて、別に一流を立てたるものなれども、また清淡・洒脫の習を脫するを得ず。訥言が創めたる土佐古風、容齋が好める歴史畫の如きは、卽ち學界に於ける國學の興隆に齊しく、また時勢の反響なり。但し、此は彼の如き價値なきを憾とするのみ。一派また一派、各〻盛衰の數を免れざりしが、未だその間に崛起して斯道の根本的革新に成功せるものなく、かかるうちに明治の昭代は來れり。

（藤岡東圃著「東圃遺稿」）

（四）鷦鷯巢二於深林一不レ過二一枝一、偃鼠飲レ河不レ過二滿腹一。（「莊子」）
（五）夜もあけばきつにはめなむくだかけのまだきに鳴きてせなをやりつる（「伊勢物語」）
（六）張湯が、幼時、肉を盜んだ鼠を捕へてその罪を劾し、これを磔にした事が「史記」に見えてゐる。
（七）西寺の老鼠わか鼠おんもつんづけさつんづ。（催馬樂）
（八）子曰、惡二紫之奪一レ朱也。（「論語」）

六　狂文三篇

一、鼠を責むる詞

偃鼠河に飲めども腹に滿つるに過ぎず、汝何ぞわが肉池を飲みほして、わが印石をして顏色なからしむるや。夜も明けば猫にはめなむか、日が暮れば落しにかけむか。地獄落しか、極樂落しか。罪の輕重を桝落しに計らば、漢の張湯がためしなきにしもあらねど、もし白鼠と內緣あらば、大黑殿の思し召しも如何と思ひて、石見銀山一等を免し、鼠衣を剝ぎ、鼠算の過料を取り、壁の穴穴、桁の隅隅、殘らず追放するものなり。この趣を西寺の老鼠より若草の鼷鼠に至るまで、よくよく申し聞かすべきものなり。

むらさきの外ににくきは肉いれの朱をうばへるねずみ色

大田南畝 狂歌師。名は覃。四方赤良・四方山人・蜀山人等の別號がある。江戸の人。文政六年（一八二三）歿、年七十五。

（一）切腹の時に用ひる懐刀。

（二）「昔南陽縣菊水、汲二下流一而延レ齢、今東海道菊河、宿二西岸一而失レ命。」と宿の柱に題した有名な源宗行の故事で、「東鑑」に見えて居る。

（三）木津河の畔で斬られた平重衡。「平家物語」に見えて居る。

かな（大田南畝著「四方のあかし」）

二、灸

如月の二日、天氣ものどかなればとて、妻なるもの、晝過ぐる頃、行燈に火とぼし、艾あぶりて、いざいざと言ふにぞ、おのれ生得灸ぎらひにて、一寸のがれに明日明後日と延ばしつれど、今日ばかりは遁るべきならず。籠城のつはものの糧盡きたる顏色にて、しぶしぶ敷皮の上にゐざり出でて、潔く諸肌おしぬぎつ。（一）九寸五分には足らじと思ふ灸箸を見やるにも、胸はがたがたと躍られぬ。菊川の宗（二）行卿、木津川の重（三）衡卿の御心も、かくこそと推しはからるるほど、襟のあたりに物ぞ當る。すはと思ふより熱さこらへ難く、齒ぎしりしつつ高くうめけば、妻なるもの、あら仰仰し、灸點の墨をつけたるにて候と言ひて笑ふ。今日は如何なる事にか、墨を塗るさへ熱しなど言ひて居れば、今ぞかはきりにて候と言ひて、指して背のあたり抑へつ。（四）なんでふ我もますらをなり世に灸据ゑぬ人やはある、かかる時おくれを見せむは、妻子にもあなづられて、かひなしとや笑はれむと思ひ念じて、せめて眼を閉ぢ、息をつめて居るほど、總身脂の汗流れて、魂消ゆる心地して、もの言ふべうもあらず。「これは灸にてはあらじ、まさしく錐もてもむにやあらむ。こころなしの大きなるをえりて燒くにこそ。最初は小さきをえりてものせよ。よや、よや。」と叫ぶほど、今は三つ四つ一度に据うるにや、背中一面ほのほを負ひたるやうにて、あら熱や、堪へ難しといふ聲、（五）太政入道殿の最期の苦患にも劣らず。

かかるに、うまごなる者の走り來て、おぢいさまの灸据うる見むとて、前の方に坐りて居り。今までは手拭を嚙み、眼口も一ところに

（四）灸据ゑぬ人やはある、かかる時おくれを見せむは、妻子にもあなづられて、かひなしとや笑はれむと

（五）平清盛が熱病で悶死したことを指す。「平家物語」に審かである。

よせて凌ぎつるを、この幼き者に恥ぢて、聲を忍ぶも術なしや。此奴かはきりの時によくぞ來らざりしと、いよいよ聲を呑みて居れば、胸に餘りて落つる涙は、灸饗にと設けたる團子も恥づる大きさなり。このうまごが顔を見るにも、(一)さしも知らじなとさへうちうめかる。

背中果てつれば、帶ひき締めむとするを、艾なほ殘りありと言ふに、なにと返答いぶき山、(二)しめぢが腹を据ゑむとなるべし。覺悟を極めて、この度は二つ胴いざといふ身になりて、のけざまに打臥したるを、會釋もなく据ゑかかる。これはさしもむたぐひにはあらず、生きながら皮を剝ぎて腑分けをさるる思にて、肛門の穴もすぼみて(三)ちりげへ昇る心地して、手足ばかりをもがくさま、さながら俎に載れるすつぽんの如し。いでや世に用なき(四)ほけびとの、さまで延年の望はなけれど、生きてあらむその間、看病人にあくびをされ、(五)大壺に

(一) かくとだにえやは伊吹のさしも草さしも知らじな燃ゆるおもひを（「後拾遺集」藤原實方）
(二) なほたのめしめ茅が原のさしも草われ世の中にあらむかぎりは（「新古今集」讀人不知）
(三) ぼんのくぼ。
(四) 老耄した人。
(五) 尿瓶。

石川雅望 狂歌師・國文學者。狂名を宿屋飯盛といふ。江戸の人。文政十三年（一八三〇）歿、年七十八。

鼻をつまませむは苦しと思ふ心より、轉ばぬ先に杖をつきて老の坂をば下らむとすなり。おのれ幼かりし頃とかく蟲腹に惱みければ、過ぎゆき給ひし二親の、ただ灸据ゑよと据ゑよと口につけて宣ひき。かく灸据うる度毎に、これこそ庭の教なれと思へば、惠み給へる慈愛の程は、今も熱くぞ身にこたへたる。（石川雅望著「狂文吾嬬那萬俚」）

三、鍾馗の讃

大臣と稱すれども隨身・舍人も從へず、降魔の靈驗ありながら鎭座せる社も見えず。顏に手足に朱をそそぎて、拔身を取つて振廻す。もし生醉かと見てあれば、柏餅を引窓から覗く。下戸か上戸か、分くべからぬ、文武兼備の進士の垂迹、げにちはやぶる紙幟、仰げばいよいよ軒に高し。（同上）

（一）國學者加藤千蔭。江戸の人。殊に歌文・書道に達してゐた。文化五年（一八〇八）歿、年七十五。

（二）國學者賀茂眞淵。遠江の人。江戸に出でて田安宗武に仕へ、また多くの門弟に教授した。明和六年（一七六九）歿、年七十三。

七　祭芳宜園大人墓文

ここに文化の五とせ九月八日、平春海謹みて芳宜園（はぎのその）の大人のお（一）くつきのみ前に菊の初花一枝をたむけ、香の木一ひらを燒きて、うなねつきて申さく。あはれ悲しきかも。君はわれに十といひて一とせのこのかみにおはするなるが、今そのかみを思ひ出づるに、君はまさにさかりの齢におはして、われはまだわらはにてぞ侍りける。常に縣（二）居の庭に物まなびに行きかひたる時、あしたにまゐるとては君のみはかしのしりへに從ひ、ゆふべにまかるとては君の御袖のもとにすがりて、相うるはしみまつれること、親子はらからにも何か異ならむ。書讀むとては君を師ともたふとみ、歌作るとてはわれをおとどひのつらにぞ教へ給ひける。

中頃にして君は仕への道にいとなくおはし、われは世のさがにかかづらひて、おのづから疎き方にも過ぎつるを、君仕へをしぞき給ひて後は、われも同じ巷に移り住めば、花を尋ぬとてはわれ道しるべをなし、月を思ふとては君が舟に相乘り、憂き事も共に憂へ、嬉しき節も共に喜びて、世にありふるわざのまめ事もあだ事も、かたみにへだてなく心をかはせること今に二十とせ、そのはじめを繰返し數ふれば、相友たること既に五十とせにぞ餘りける。さるを今おくれたてまつりて、いつの世にか相見む、いづれの時にかことはむ。常無きは人の身の習ぞと知るも、これをいかでか歎かざらむ、かかるを誰かはよく堪へむ。

あはれ悲しきかも、文の林世世に衰へ、言の葉の道日日にくだり行けるを、賀茂の翁世に出でて、今を捨てて古に復り、青雲の高き心

しらひを求め、賤機の文あるみやびごとを貴みいへれど、(一)くひぜを守り、舟(二)にきだつくる輩、かれになづみ、ここにひかれて、猶あやしみとがむるたぐひは多く、たまあひてよくうけひく人なむ稀なりしを、君ひとり心を起して、普く諭し、廣く誘ひしより、近き人は目のあたり相うづなひ、遠き人は遙かに靡き來て、古ぶりの歌世に盛りになりにたるは、誠に君の力によりてなり。

そのみづから詠みいで給へる歌を見るに、古きしらべ、新しき姿、とりどりに備はらざるはなし。その古を寫せるは藤原寧樂の御世に及び、後のたくみに倣へるは堀河・鳥羽の御時にくだらず。心に思ふ事は口に盡さざる事なく、目に觸るるものは言葉にのせざる事なむあらざりける。これを見て、高きも短きもめでたふとまざる人なし。また事好みの人は、その名を君に知られては身の面おこしと

(一) 宋人有ニ耕レ田者一。田中有レ株、兎走觸レ株、折レ頸而死。因釋ニ其耒一而守レ株、冀ニ復得レ兎。兎不レ可ニ復得一、而身爲ニ宋國笑一。（「韓非子」）

(二) 楚有ニ涉レ江者一。其劍自ニ舟中一墜ニ于水一。遽刻ニ其舟一曰、是吾劍所ニ從墜一也。舟止、從ニ其所レ刻處一入レ水、求レ之。舟已行矣、而劍不レ行。求レ劍若レ此、不ニ亦惑一乎。（「呂氏春秋」）

思ひて世にも誇り、君の一歌を得ては價なき寶にもかへじといひてぞ深く喜びける。

然るを今、黄金の聲忽ち止みて、玉の響再び聞えずなりぬるは、わがどちの歎のみかは、おほかたの世人の憂ともいひつべし。これをいかでか惜しまざらむ、かかるを誰かは慕はざらむ。あはれ悲しきかも。わがかく言あげするを、泉の下にもさやかに聞し召し、天翔りても遙かにみそなはせとなむ申す。（村田春海著「琴後集」）

村田春海　國學者。江戸の人。賀茂眞淵の門人。文化八年（一八一一）歿、年六十八。

○

千蔭みまかりて七日に當りける日菊花一枝贈るとて

おもひきや山路のきくを手折りもて袖になみだのふちなさむとは

（村田春海）

八　菅笠日記抄

ことし明和(一)の九年といふとし、いかなるよき年にかあるらむ、よき人のよく見てよしといひおきける、吉野の花見にと思ひ立つ。そもそもこの山分衣(やまわけごろも)のあらましは、二十年ばかりにもなりぬるを、春毎にさはりのみして、いたづらに心のうちにふりにしを、さのみやはとあながちに思ひおこして出でたつになむありける。さるは、何ばかり久しかるべき旅にもあらねば、そのいそぎとて殊にするわざもなけれど、心はいそがはし。明日立たむとての日は、まだつとめてより幣きざみ(二)そそくりなんどいとまもなし。

＊　＊　＊　＊

頃は彌生のはじめ、五日の曉、まだ夜をこめて立出でける。市場(四)の

(一) 後櫻町天皇の御代の年號。（一七四四―一七四七）但しその九年十一月改元されて安永といふ。

(二) よき人のよしとよく見て好しといひし吉野よく見よよき人よく見つ（「萬葉集」天武天皇）

(三) せはしく手先を働かすこと。

(四) 三重縣一志郡米ノ庄村に屬する字。宣長の住んでゐた飯南郡松坂町の北方約四粁。

庄なんどいふわたりにて、夜は明けはてにけり。さてゆく道は、三渡りの橋のもとより右に岐れて、川のそひをやや登りて、板橋を渡る。このわたりまでは、事にふれつつをりをり物するところなれば、めづらしげもなきを、このわかれゆくかたは阿保(五)越とかやいひて、伊賀の國をへて初瀬(六)にいづる道になむありける。この道もむかし一度二度は物せしかど、年へにければ皆わすれて、今はじめたらむやうにいとめづらしく覺ゆるを、よべより空うちくもりて、をりをり雨ふりつつ、よものながめもはればれしからず、旅衣の袖ぬれて、うちつけにかこちがほなるもかつはをかし。

＊　＊　＊　＊

こよひ雨いたく降り、風烈しきに、故郷の空はさしおかれて、まづ花の梢やいかになるらむと、吉野の山のみ夜一夜安からず思ひや(七)

(五) 阿保は同縣名賀郡にある村名。その附近にある山道を阿保越といふ。

(六) 奈良縣磯城郡にある町名。

(七) 出立の翌六日の夜の記事。

られて、いとど目もあはぬに、この宿の主にやあらむ、夜中に起出でて、さもいみじき雨風かな、かくて明日は必ず晴れなむとぞいふなる。聞きふせりて、いかでさもあらなむと念じをり。

*　*　*　*　*

(一)明けがたより雨やみて、起出でて見れば、雲もやうやう薄らぎつつ、晴れぬべき空のけしきなるに、家あるじの心の内はまさしかりけりといと嬉し。日頃の雨にゆくさき道いとあしく、山路にはたあなりと聞けば、今朝は誰も誰もみな駕籠といふ物に乗りてなむ出でたつ。さるは、いと怪しげにむつかしき物の、程さへ狹くて、うちみじろぐべくもあらず、尻痛きに、朝寒き谷風さへはしたなう吹入りて、いとわびしけれど、行き困じたる旅心地には、いとよう忍ばれて、かち行くよりはこよなく勝りておぼゆるも怪しくなむ。もとより

(一)翌七日の記事。

(二)同じ日の記事。
(三)大和・河内の國境をなせる山脈で、海拔一一一二米を有する金剛山も、その端に連なつてゐる。
(四)奈良縣高市郡今市町の南方に聳え立つ山。海拔一九九米。

本居宣長　國學者。伊勢の人。賀茂眞淵の門人。享和元年（一八〇一）歿、年七十二。

相伴なふ人は、あはせて六人、同じ物に乗りつれたる、前後よびかはしては、物語なんどもし、やや後れ先立ちなんどもしつつ行く。

*　*　*　*　*

(一)なほ山のそばぢを行き行きて、初瀬近くなりぬれば、向ひの山あひより葛城山・(二)畝傍山(三)なんどはるかに見えそめたり。よその國ながら、かかる名どころは明けくれ書にも見馴れ、歌にも詠馴れてしあれば、故里人なんどのあへらむ心地して、うちつけにむつまじく覺ゆ。けはひ坂とてさがしき坂を少し下る。この坂路より、初瀬の寺も里も、目の前に近く、あざあざと見渡されたる景色えもいはず。大方ここまでの道は、山ぶところにて、異なる見るめもなかりしに、さしもいかめしき僧坊・御堂のたちつらなりたるを、にはかに見つけたるは、あらぬ世界に來たらむ心地す。（本居宣長著「本居宣長全集」による）

九　花月草紙

一、櫻

なしと聞けばありといはまほしく惡しきといふを善きとことかへていはむこそいとねぢけたることなれ櫻てふ花はわが國のものなるを唐國にもありとてさまざま例など引きつくれど櫻かいたる繪もなくかなへりと思ふ詩もなければなしとこそいふべけれいでや櫻といはでしも花とだにいへば異木にはまぎれぬものをほのぼのと明けゆく山際雲か雪かとばかり咲きみちたる霞こめたる夕まぐれ花のけはひもおぼろに見えてここにのみ暮れのこす景色などいふは淺かりけり風に散りかふも雨にぬるるも遠山に見るも軒端にむかふも曙も夕暮も露のひるまも目かるる

時しなきを殊にわが國ぶりの姿にて枝もすなほに花のかたちもゆたけくにほひさへもこちたからぬも怪しきまでにこそ覺ゆるものなれ

二、月

月のさしのぼる頃、曙の空おぼえて横雲のたなびきたるにややにほひそめたれど遠山の梢にいさようて姿も見えずからうじてさしのぼりけり梢の憂さも晴れにけりと思へばいつしか雲の一つ出で來たるが近寄るほどあやにくに月のかたより雲のうちへかき入るやうに見ゆこは如何にせむとしばし打ちまもるに雲の端つかたあかう見ゆるにぞ出ではなれたらばはやかからむ隈はあらじと思ふにいつのまにかまた白雲の月待ちがほにたなびきて見ゆれば胸打ちつぶれて打見るにはじめの雲より出でたる光

いとあたらしう見えてことにさやけしかの待ちゐたる雲に向へばまたはせ入るもいとつらし月の入りて見れば雲もさすがにこちたからずここかしこにそれとおもかげ見ゆるにぞひたすらにうらみはてで見ゐたるうちに衣手もしめりゆきて露も蟲の音もさかりなりけりつくづくと對ひ居たれば心のはてなきやうにこそ覺えしか

三、空にまかす

久方の空にまかせてわがささやかなる才を用ひざれとはいへど空にまかするに深き心あるべし星の光みてもはや沖はあらき風吹出でつこのあたりへは明日の晝つ方吹きくべしといふ事も知らるれば心して乘るをこそ空にまかすとはいはめ沖の風吹くも吹かぬも問はずして今ここの波平かなればとてはや漕出でて

行くを空にまかすとはいはじ物食ふにてもあれすべて身をやしなふ道をつくしそのほどを愼みて後生死を空にまかすべきをやしなひのことは心とせずただ己がほりすることにのみ隨ひて生死を空にまかすといふこともありぬべし

四、道を學ぶ人

かの人は雪螢(一)(二)あつめし窓に年をつみて文見る道に心をつくし侍るなりされば世の中の事にはいと疎く侍りといへばさるこそまことの道學ぶ人なりけれと褒めものするものありとやもとより道學ぶものは五(三)つの常五つの道よりして人を修め己を修むる道學ぶより外のことはなしされば世の事にさとく今のあたりのみかは千年の前の世のこと見ぬもろこしの昔今のさまより盛り衰ふるきざし人の心の上より仕ふる道のくさぐさに至るまでも

（一）孫氏世錄曰、康家貧、無レ油、常映レ雪讀レ書。少小清介、交遊不レ雜。（「蒙求」）

（二）晉車胤、恭勤不レ倦博覽多通、家貧不二帶得ロ油。夏月則練囊盛二數十螢火一以照レ書、以夜繼レ日焉。（「蒙求」）

（三）仁義禮智信五常之道。（「漢書」）

明かなるこそ道學ぶ人とはいふべけれこの世の事におろそかにてはいかで道學ぶ人とはいふべからむ

五、膽を練る法

膽を練るといふは如何にして得てむこれ天命を知るにありこの知るはまことに知るをいふなりただ黄金などの欲は去り易し好名の欲ぞいとかなしき父君の命に背きて身を潔くし朝廷の事をそしりて直を賣るこれを忍ぶならば何か忍び得ざらむとまで古よりいひしをや唯その天命をまことに知りて疑ふことなければつゆも心の煩なく塵ばかりも穢なし獨寢衾に恥ぢずとかいふかの浩浩(一)たる氣ともいふべからむ

六、人を責むること

人を責むるはあらはなるを責むべしとか聞きしまづ面(二)あらた

（一）我善養ニ吾浩然之氣ヲ。（中略）其爲レ氣也、至大至剛、以レ直養ヒテ而無レ害ス則チ塞ガル二于天地之間ニ一。其爲ル氣也、配ス二義與ト一ニ道ヲ。無レ是餒ウル也。（「孟子」）

（二）君子豹變シ、小人革ヘ面ヲ。（「易經」）

（三）羊質虎皮ス。（「揚子法言」）

（四）支那の昔の暴君の代表とされてゐるもの、即ち夏の桀王と殷の紂王。

（五）支那の昔の聖天子の代表とされてゐるもの、即ち堯帝と舜帝。

松平定信　白河城主。田安宗武の子。松平定邦の養嗣。幕府の老中となり、所謂寛政の治としてその功績は知られてゐる。一面學を好み、歌文に秀でてゐた。文政十二年（一八二九）歿、年七十二。

めたらば善しとこそいはめかれは虎(一)の皮著ぬる羊なりとはいはじ羊にもせよ虎の皮著たらば虎にしてこそ養はめさらば千里をば走らずとも羊の力の及ぶだけは走りもしなむ外を責めて内を責めざれと昔より聞きしを

七、妬みごころ

わが惡しきをば桀(四)紂を引きなだめ人の善きをば堯(五)舜を引きいでて咎むかれはかかる惡しきことなしぬといへばげにさあらむといふこのものかくよきことし侍りぬといへばいかがあらむいぶかしといふげにも人は惡しき心あるものかなといへばよき名得まほしと思ふが故に人の惡しきにてわが心をなだめ人の善きをば妬むより出で來るなりといひし　（松平定信著「花月草紙」）

一〇 羽衣

ワキ　漁夫白龍
ツレ　漁夫二人
シテ　天女

ワキ ツレ 謠「風早の三保の浦わを漕ぐ舟の、浦人騷ぐ波路かな。」

ワキ 謠「これは三保の松原に、白龍と申す漁夫にて候。」

ワキ ツレ 謠「萬里の好山に雲忽に起り、一樓の明月に雨はじめて霽れり。げにのどかなる時しもや、春のけしき松原の、波立ちつづく朝霞、月ものこりの天の原、及びなき身の眺にも、心空なる景色かな。忘れめや、山路を分けて清見潟、遙かに三保の松原に、立ちつれいざや通はむ、立ちつれいざや通はむ。風向ふ雲のうき波立つと見て、釣せで人や歸るらむ。待てしばし、春ならば、吹くものどけき朝風の、松は常磐の聲ぞかし。波は音なき朝なぎに、釣人多き小舟かな。」

（一）風早の三保の浦わを漕ぐ舟の舟人さわぐ波立つらしも（「萬葉集」）

（二）千里好山雲乍歛、一樓明月雨初晴。（「詩人玉屑」）

（三）風むかふ雲の浮波立つと見てつりせぬ先にかへる舟人（冷泉爲相）

ワキ「われ三保の松原にあがり、浦の景色をながむるところに、虛空に花降り、音樂聞え、靈香四方に薰ず。これ常事と思はぬところに、これなる松に美しき衣懸れり。寄りて見れば、色香妙にして常の衣にあらず。如何さま、取りて歸り、古き人にも見せ、家の寶となさばやと存じ候。」

能の羽衣

シテ「なうその衣は此方のにて候。何しに召され候ぞ。」

ワキ「これは拾ひたる衣にて候程に、取りて歸り候よ。」

シテ「それは天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべきものにあらず。もとの如くに置き給へ。」

ワキ「そも、この衣の御主とは、さては天人にてましますかや。さもあらば、末世の奇特に留め置き、國の寶となすべきなり。衣を返すことあるまじ。」

シテ「悲しやな、羽衣なくては飛行の道も絶え、天上に歸らむこともかなふまじ。さりとては、返したび給へ。」

ワキ謠「この御詞を聞くよりも、いよいよ白龍力を得、詞本よりこの身は心なき、天の羽衣取隱し、謠叶ふまじとて立ちのけば、」

シテ謠「今はさながら天人も、羽なき鳥の如くにて、上らむとすれば衣なし、」

ワキ謠「地に又住めば下界なり。」

シテ謠「とやあらむ、かくやあらむと悲しめど、」

ワキ謠「白龍衣を返さねば、」

シテ謠「力及ばず、」

ワキ謠「せむかたも、」

地謠「涙の露の玉鬘、かざしの花もしをしをと、天人の五衰(一)も、目の前に見えてあさましや。」

シテ謠「天(二)の原ふりさけ見れば霞立つ、雲路まどひて行くへ知らずも。」

地謠「住みなれし空にいつしか行く雲の、羨しき景色かな。迦陵頻伽の馴れ馴れし聲、今更にわづかなる、雁がねの歸り行く、天路を聞けばなつかしや。千鳥鷗の沖つ波、行くか歸るか春風の、空に吹くまでなつかしや、空に吹くまでなつかしや。」

ワキ「いかに申し候。御姿を見奉れば、餘りに御痛はしく候程に、衣を返し申さうずるにて候。」

シテ「あら嬉しや。さらば此方へ賜はり候へ。」

ワキ「暫く。承り及びたる天人の舞樂、只今ここにて奏し給はば、衣を返し申すべし。」

(一)天人の身にあらはれる五種の衰弱。即ち、身光不レ現、レ華鬘萎顇、兩腋汗流、體便臭穢、不レ樂二本座一。

(二)天の原ふりさけ見ればかすみ立つ雲路まどひて行くへ知らずも（「丹後風土記」）

シテ「嬉しや、さては天上に歸らむことを得たり。このよろこびに、とてもさらば、人間の御遊の形見の舞、月宮をめぐらす舞曲あり。只今ここにて奏しつつ、世のうき人に傳ふべし。さりながら、衣なくては叶ふまじ。さりとては、まづ返し給へ。」

ワキ「いや、この衣を返しなば、舞曲をなさでそのままに、天にやあがり給ふべき。」

シテ「いや、疑は人間にあり。天に僞なきものを。」

ワキ謠「あら恥しや、さらばとて、羽衣を返し與ふれば、」シテ謠「少女は衣を著しつつ、霓裳羽衣の曲をなし、」ワキ謠「天の羽衣風に和し、」シテ謠「雨に潤ふ花の袖、」ワキ謠「一曲を奏で、」シテ謠「舞ふとかや。」地謠「東遊の駿河舞、東遊の駿河舞、この時や始なるらむ。」

地謠「それ、久方のあめといつぱ、(一)二神出世のいにしへ、十方世界を定

(一)伊弉諾・伊弉册の二神。

めしに、空は限もなければとて、ひさかたのそらとは名づけたり。」

シテ謠「然るに、月宮殿の有樣、玉斧の修理とこしなへにして、」地謠「白衣黑衣の天人の、數を三五に分つて、一月夜夜のあまをとめ、奉仕を定め役をなす。」シテ謠「われも數ある天少女、」地謠「月の桂の身を分けて、假に東の駿河舞、世に傳へたる曲とかや。(二)春がすみたなびきにけり、久方の月のかつらも花や咲く。げに、花かつら色めくは、春のしるしかや。面白や天ならでここも妙なり。(三)天つ風雲の通ひ路吹きとぢよ。少女の姿しばしとどまりてこの松原の春の色を三保が崎、月清見潟、富士の雪、いづれや春の曙。たぐひ波も松風も、のどかなる浦の有樣。その上、天地は何を隔てむ、玉垣の内外の神のみするゑにて、月もくもらぬ日の本や。」シテ謠「君が代は、(四)あまの羽衣まれにきて、」地謠「撫づとも盡きぬいはほぞと、聞くも妙なり東歌、聲添へてかずかずの、笙

(二)春霞たなびきにけり久方の月の桂も花や咲くらむ（「後撰集」紀貫之）

(三)天つかぜ雲の通ひ路吹きとぢよ少女の姿しばしとどめむ（「古今集」遍昭）

(四)君が代は天の羽衣まれにきてなづともつきぬいはほなるらむ（「拾遺集」詠人不知）

笛琴箜篌、孤雲の外に充ち滿ちて、落日の紅は、蘇命路の山をうつして、綠は波に浮島が、はらふ嵐に花ふりて、げに雪をめぐらす、白雲の袖ぞ妙なる。」シテ謠「南無歸命月天子、本地大勢至。」地謠「東遊の舞の曲。」シテ謠「あるひは、天つ御空の綠の衣、」地謠「又は春たつ霞の衣。」シテ謠「色香も妙なり、少女の裳裾。」地謠「左右左、さいう颯颯の、花をかざしの天の羽袖。なびくも、かへすも舞の袖。東遊のかずかずに、東遊のかずかずに、その名も月の宮人は、三五夜中の空にまた、滿願眞如の影となり、御願圓滿、國土成就、七寶充滿の寶を降らし、國土にこれを施し給ふ。さるほどに、時移つて、天の羽衣浦風にたなびきたなびく、三保の松原、浮島が雲の、愛鷹山や富士の高嶺、かすかになりて、天つ御空の霞にまぎれて失せにけり。」（「謠曲大觀」による）

（一）須彌山の別名。
（二）月宮殿に住する天王。「法華文句」に「名二月是寶吉祥月天子一、大勢至應作。」
（三）本地は化身に對して、その本體をいふ。阿彌陀佛の脇士。

二　物のあはれ

一、花と月

花はさかりに、月は隈なきをのみ見るものかは。雨に向ひて月を戀ひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、猶あはれになさけ深し。咲きぬべき程の梢、散りしをれたる庭などこそ見處おほけれ。歌の詞書にも、「花見にまかれりけるに、早く散りすぎにければ。」とも、「障る事ありてまからで。」なども書けるは、「花を見て。」といへるに劣れる事かは。花の散り、月の傾くを慕ふならひはさる事なれど、殊にかたくなる人ぞ、「この枝かの枝散りにけり。今は見處なし。」などはいふめる。よろづの事も始終こそをかしけれ。望月の隈なきを千里の外まで眺めたるよりも、曉近くなりて待ちいでたるが、いと心深う、青み

（一）たれこめて春のゆくへを知らぬまに待ちし櫻もうつろひにけり（「古今集」藤原因香）
（二）三五夜中新月色、二千里外故人心。（白樂天）

たるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木の間の影、うちしぐれたるむら雲がくれのほど、またなくあはれなり。椎柴・白樫などの濡れたるやうなる葉の上に、きらめきたるこそ、身にしみて、心あらむ友もがなと、都こひしうおぼゆれ。

すべて、月花をば、さのみ目にて見る物かは。春は家を立去らでも、月の夜は閨の内ながらも思へるこそ、いと頼もしうをかしけれ。

二、折節の移り變り

折節の移り變るこそ物毎にあはれなれ。物のあはれは秋こそまされと人毎にいふめれど、それもさるものにて、今ひときは心も浮立つものは春の景色にこそあめれ。鳥の聲などもことの外に春めきて、のどやかなる日影に、垣根の草もえ出づる頃より、やや春深く霞み渡りて、花もやうやうけしきだつ程こそあれ、をりしも雨風う

（一）春はただ花のひとへに咲くばかり物のあはれは秋ぞ優れる（「拾遺集」讀人不知）

ち續きて、あわただしく散りすぎぬ。青葉になり行くまで、よろづにただ心をのみぞ惱ます。花（二）橘は名にこそ負へれ、なほ梅（三）の匂にぞ古の事も立返り戀しう思ひ出でらるる。山吹の清げに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひ捨て難きこと多し。

六月祓

「灌（四）佛の頃、祭（五）の頃、若葉の梢涼しげに茂り行く程こそ、世のあはれも人の戀しさもまされ。」と人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月、あやめ葺く頃、早苗とる頃、水雞のたたくなど、心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶ

（二）五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする（古今集、讀人知らず）

（三）色よりも香こそあはれと思ほゆれたが袖ふれし宿の梅ぞも（古今集、讀人知らず）

（四）四月八日の釋迦の誕生會。

（五）賀茂の葵祭。

るもあはれなり。六月祓またをかし。

七夕祭るこそなまめかしけれ。やうやう夜寒になるほど、雁鳴きて來る頃、萩の下葉色づくほど、早稲田かりほすなど、取集めたる事は秋のみぞ多かる。また野分のあしたこそをかしけれ。いひ續くれば、皆「源氏物語」「枕草紙」などにことふりにたれど、同じ事又今更にいはじとにもあらず、おぼしき事いはぬは腹ふくるるわざなれば、筆にまかせつつ、あぢきなきすさびにて、かいやり棄つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。

さて、冬枯の景色こそ、秋にはをさをさ劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りとどまりて、霜いと白う置けるあした、遣水より煙の立つこそをかしけれ。年の暮れはてて、人毎に急ぎあへる頃ぞ、またあはれなる。すさまじきものにして見る人もなき月の、寒けく澄める二

（一）おぼしきこと言はぬは、げにぞ腹ふくるる心地しける。（「大鏡」）

十日あまりの空こそ心細きものなれ。（二）御佛名、（三）荷前の使立つなどぞあはれにやむごとなき。公事どもしげく、春のいそぎにとりかさねて催し行はるるさまぞいみじきや。（四）追儺より（五）四方拜に續くこそ面白けれ。

つごもりの夜いたう暗きに、松どもともして、夜半すぐるまで人の門たたき走りありきて、何事にかあらむ、ことごとしくののしりて、足を空に惑ふが、曉方より流石に音なくなりぬるこそ、年の名殘も心細けれ。亡き人の來る夜とて魂祭るわざは、このごろ都にはなきを、東の方には猶する事にてありしこそあはれなりしか。

かくて明けゆく空のけしき、きのふに變りたりとは見えねど、引替へめづらしき心地ぞする。大路のさま、松立てわたして、はなやかに嬉しげなるこそ、またあはれなれ。（吉田兼好著「徒然草」）

（二）十二月十九日から三日間、佛名を唱へる公事。

（三）御陵と功臣の墓とに幣帛を奉る敕使。

（四）十二月晦日の夜に惡鬼を追ふ公事。

（五）元旦寅の刻に、天皇が四方及び山陵を拜し給ふ儀式。

吉田兼好 歌人。始め後宇多天皇に仕へて左兵衛尉に任ぜられたが、天皇の崩後、僧となり、山水に放浪し風月を友とした。正平五年（一三五〇）寂、年五十七。

一二　遷幸

元弘二年の春にもなりぬ。御門(一)は未だ六波羅におはします。きさらぎの頃、空の氣色のどやかに霞みわたりて、ゆるらかに吹く春風に軒の梅なつかしくかをり來て、鶯の聲うららかなるも、うれはしき御心地には、もの憂(二)かる音にのみ聞し召しなさる。

かの承久の例にとや、東よりの御使には、長井の右馬助高冬といふものなるべし。これは賴朝の大將の時より鎌倉に重き武士にて、未だ若けれどもかかる大事にも上せけるとぞ申しける。遂に隱岐の國へ遷し奉るべしとて、彌生の初の七日に都を出でさせ給ふ。今はと聞し召す御心惑ひども、言へば更なり、處處の歎、近う仕うまつりし人人の心地ども、措き處なく悲し。御門も限なく御心惱むべし。

(一) 後醍醐天皇。原本には「先帝」としてある。

(二) 春立てど花もにほはぬ山里はもの憂かる音にぞなく（「古今集」在原棟梁）

いとかうしも人に見えじと、かつは思し靜むれど、あやにくにすすみ出づる御涙を、もて隱しつつおはします。ふりにし事を思し出づるにも、立返りまた世をやすく思さむ事のいと難ければ、よろづ今をとぢめにこそと思しめぐらすに、人やりならず口惜しきちぎり加はりける前の世のみぞ、盡きせず恨めしき。

つひにかく沈みはつべきむくいあらば上なき身とはなに生れけむ

巳の時ばかりに出でさせ給ふ。網代の御車に、御前どもなどは、故(三)院の御世より仕うまつり馴れにしものども、あるかぎり參れり。御車寄に西園寺、中納言公重さぶらひ給ふ。上(四)は御冠に世の常の御直衣・指貫、白綾の御衣一襲(かさね)奉れり。こぞの今日は、北山にて花の宴せさせ給ひしも、あはれに思し出でられて、その日の事かきつらね戀し

(三) 後宇多上皇。

(四) 後醍醐天皇。

くおぼさる。人人の祿にこそは賜はせしを、今日は御旅衣に裁ちかふるも、あはれに、定めなき世のならひ、今更こころ憂し。御車に奉るとて、日頃おはしましつる傍の障子に書きつけさせ給ふ。

いさ知らずなほうき方のまたもあらばこの宿とても忍ばれやせむ

御供には、内侍(一)、三位殿・大納言、君・小宰相など、男には行房、中將・忠顯、少將ばかり仕うまつる。おのがじし都の名殘どもいひ盡し難し。六波羅よりの御送りの武士、さならでも名ある兵ども、千葉、介貞胤を始として、覺えことなる限り十人選びて奉る。いろいろの綾錦の水干・直垂などいふ物、さまざまに織りつくし染めつくして、いみじき清らを好みととのへたれば、かくてしも世に珍しき見物なり。六波羅より七條を西へ、大宮を南へ折れて、東寺(二)の門前に御車おさへら

(一) 藤原廉子。

(二) 今の下京區九條町にある。

る。とばかり御念誦(ねんず)あるべし。物見車ところせき程なり。

よろしき女房も壺裝束などして、徒歩の者どもも打混れり。若きも老いたるも、尼・法師・あやしき山がつまで立ちこみたるさま、竹の林に異ならず。各〻目おし拭ひ、鼻啜りあへる氣色ども、げにうき世のきはめは今に盡しつる心地ぞする。崇德院の讃岐におはしましけむ程の有樣、後鳥羽院の隱岐に遷らせ給ひけむ時なども、さこそはありけめなれど、つてにのみ聞きて、見ねば知らず。これを初めたる心地ぞする。日頃は何の御にほひにも觸れず、數ならぬ人及ばぬ身までも、今日の御別のあはれさ、なべて措き處なげにぞ惑ひあへるかし。君も御簾少しかきやりて、このもかのも御覽じ渡しつつ、御目とまらぬ草木もあるまじかんめり。岩木ならねば、武士の鎧の袖どももしほとけげにぞ見ゆる。都の梢(三)を隱るるまで御覽じ送るも猶

(三) 君が住む宿の梢をゆくゆくもかくるるまでにかへり見しはや(菅原道眞)

夢かと覺ゆ。鳥羽殿におはしましつきて、御裝あらため、破子などまゐらせけれど、氣色ばかりにてまゐらず。これより御輿に奉れば、留まるべき御前どもの、空しき御車を泣く泣くやりかへるとて、くれ惑ひたる氣色、いと堪へがたげなり。

かくて、君は遙かに赴かせ給ふ。淀のわたりにて、昔八幡(一)の行幸ありし時、橋渡(二)しの使なりし佐佐木佐渡判官といふもの、今は入道して、今日の御おくり仕うまつれるに、その世の事おぼし出でられて、いと忍びがたさに賜はせける、

しるべする道こそあらずなりぬとも淀のわたりは忘れしもせじ

津の國昆陽(三)野の宿といふ處につかせ給ひて、夕づく夜ほのかにをかしきを眺めおはします。

(一)石清水八幡宮。
(二)桂川や淀川に浮橋を渡す役。
(三)兵庫縣河邊郡稻野村大字昆陽。
(四)兵庫縣にあり、尼崎市と西宮市との中間を流れ、大阪灣に注ぐ川。

命あればこやの軒端の月も見つまた如何ならむゆく末のそら

昆陽野より出でさせ給ひて、武庫(四)川・神崎(五)・難波(六)・住吉(七)など過ぎさせ給ふとて、御心のうちにおぼす筋あるべし。廣(八)田の宮のわたりにても、御輿とどめて拜み奉らせ給ふ。葦屋(九)の里、雀(一〇)の松原、布引(一一)の瀧など御覽じやらるるも、ふるき御幸どもおぼし出でらる。生田(一二)の森をば問はで過ぎさせ給ひぬめり。

和田(一三)の岬、刈藻(一四)川を打渡して、須磨(一五)の關にかからせ給ふ。かの行平の中納言「關ふきこゆる」(一六)といひけむは浦よりをちなるべし。あはれに御覽じわたさる。源氏の大將の「泣く(一七)ねにまがふ」と宣ひけむ浦浪、今もげに御袖にかかる心地するも、さまざま御涙の催しなり。播磨の國へつかせ給ひて、鹽屋(一八)・垂水(一九)といふ處をかしきを問はせ給へば、

(五)同縣川邊郡小田村の一字。
(六)今の大阪市。
(七)兵庫縣武庫郡にある町。
(八)同郡大社村にある官幣大社廣田神社。
(九)兵庫縣武庫郡。
(一〇)(一一)(一二)(一三)(一四)(一五)すべて今は神戸市に屬する地名。
(一六)旅人のたもとすずしくなりにけり關吹きこゆる須磨の浦風(「續古今集」在原行平)
(一七)こひわびて泣く音にまがふ浦浪は思ふ方より風や吹くらむ(「源氏物語」)
(一八)(一九)共に今の明石郡に屬する地名。

「さなむ。」と奏するに、「名を聞くより、からき道にこそ。」と宣はせて、さしのぞかせ給へる御さまかたち、舊りがたくなまめかし。けぢかき限は、あはれにめでたうもと思ひ聞ゆべし。

大藏谷（一）といふところ少し過ぐる程にぞ、人麿の塚はありける。明石の浦を過ぎ給ふに、「島がくれゆく舟」（二）どもほのかに見えてあはれなり。

水の泡の消えてうき世を渡る身のうらやましきは海人のつり舟

野中の清水、（三）二見の浦、（四）高砂（五）の松など、名あるところどころ御覽じ渡さるるも、かからぬ行幸ならばをかしうもありぬべけれど、よろづかきくらす御みだり心地に、御目とまらぬも、我ながらいたうくんじにけるかなと思さる。いと高き山の峯に花面白く咲きつづき

（一）今の明石市。
（二）ほのぼのと明石の浦の朝霧に島かくれゆく舟をしぞ思ふ（「古今集」柿本人麿）
（三）兵庫縣明石郡にある。
（四）（五）ともに同縣加古郡にある。

て、白雲を分けゆく心地するも艶なるに、都の事かずかず思し出でらる。

花はなほうき世も分かず咲きてけりみやこも今やさかりなるらむ

十二日に、（六）加古川の宿といふ處におはします程に、（七）妙法院、宮讃岐へ渡らせ給ふとて、同じ道少しちがひたれど、この川の東、野口といふ處まで參り給へるよし奏せさせ給へば、いとあはれに相見まほしう思さるれど、御送りの兵ども許し聞えねば、宮むなしく歸らせ給ふ御心のうち、堪へ難く亂れまさるべし。さらなる事なれど、かばかりの事だに御心にまかせずなりぬる世の中、いへばえに、つらく恨めしからぬ人なし。（著者未詳「增鏡」による）

（六）今の加古郡加古川町。
（七）尊澄法親王。後醍醐天皇の皇子。

(一) 孝經。

一三　いさよふ月

昔、壁の中より求め出でたりけむ書(一)の名をば、今の世の人の子は夢ばかりも身の上の事とは知らざりけりな。みづぐきの岡の葛葉、かへすがへすも書きおく跡たしかなれども、かひなきものは親のいさめなりけり。又賢王の人を捨てたまはぬ政事にも漏れ、忠臣の世を思ふなさけにも捨てらるるものは、數ならぬ身一つなりけりと思ひ知りながら、又さてしもあらで、なほこの愁こそやる方なく悲しけれ。

更に思ひ續くれば、やまと歌の道は、ただ誠少なく、あだなるすさびばかりと思ふ人もやあらむ。日の本の國に、天の岩戸ひらけし時、四方の神たちの神樂の詞を始めて、世を治め、物を和ぐる媒となり

(二) 藤原定家及びその子爲家が、二たび敕撰集の撰者となつたことを云ふ。即ち、定家は「新古今」「新敕撰」を撰し、爲家は「續後撰」「續古今」を撰したのである。

(三) 細川は兵庫縣美囊郡にある細川庄。「堰きとめられし」は、異腹の子爲氏のために奪はれたことを云ふ。

(四) 人の親の心は闇にあられども子を思ふ道にまどひぬるかな（「後撰集」藤原兼輔）

にたるとぞ、この道のひじりたちは記し置かれたりける。

さてもまた集を撰ぶ人は例多かれど、二(二)たび敕をうけて世世に聞えあげたるは、たぐひ猶あり難くやありけむ。その後にしもたづさはりて、三人のをのこども、百千の歌の古反故どもを、いかなる緣かありけむ、預かりもたることあれど、道をたすけよ、子をはぐくめ、後の世を弔へとて、深き契を結びおかれし細川(三)の流も、故なく堰きとめられしかば、跡とふ法の燈火も、道を守り家をたすけむ親子の命も、もろともに消えを爭ふ年月を經て、危く心細きものから、何としてつれなく今日までは長らふらむ。惜しからぬ身一つは安く思ひ捨つれども、子(四)を思ふ心の闇は猶しのび難く、道を顧みる恨は遺らむ方なく、さてもなほ東の龜の鏡に寫さば、曇らぬ影もや顯るると、せめて思ひ餘りて、よろづのはばかりを忘れ、身をやうなきもの

になしはててゆくりもなく、いさよふ月にさそはれ出でなむとぞ思ひなりぬる。さりとて文屋(一)康秀が誘ふにもあらず、住(二)むべき國もとむるにもあらず。頃はみ冬立つ初の定めなき空なれば、降りみ降らずみ時雨も絶えず、嵐にきほふ木の葉さへ、涙と共に亂れ散りつつ、事に觸れて心細く悲しけれど、人(三)やりならぬ道なれば、いきうしとても止まるべきにもあらで、何となく急ぎ立ちぬ。

目かれせざりつるほどだに、荒れまさりつる庭も籬も、ましてと見廻されて、したはしげなる人人の袖のしづくも慰めかねたる中にも、侍從(四)・大夫(五)などのあながちに打屈したる樣、いと心苦しければ、さまざま言ひこしらへつ。

世世に書置かれける歌の草紙どもの奥書などして、あだならぬ限をえりしたためて、侍從の方へ送るとて、書添へたる歌、

(一) 文屋康秀が三河の掾になりて、あがた見にはえ出でたたずやといひやりける返事によめる。わびぬれば身を浮草の根をたえて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ（「古今集」小野小町）

(二) 昔男ありけり。その男身をやうなきものに思ひなして、京にはあらじ、東の方に住むべき國もとめにとて行きけり。（「伊勢物語」）

(三) 人やりの道ならなくに大方はいきうしといひていざ歸りなむ（「古今集」源實）

(四) 爲相。

(五) 爲守。

和歌の浦にかきとどめたる藻鹽草これを昔のかたみとも見よ

これを見て、侍從のかへりごといと疾くあり。

遂によもあだにはならじ藻鹽草かたみをみよのあとに殘せば

このかへりごと、いとおとなしければ、心安くあはれなるにも、昔の人に聞かせ奉りたくて、又うちしほたれぬ。

大夫の傍さらず馴れ來つるを、振捨てられなむ名殘、あながちに思ひ知りて、手習したるを見れば、

はるばると行くさき遠く慕はれていかにそなたの空を眺めむ

と書きつけたる、ものより殊にあはれにて、同じ紙に書きそへつ。

つくづくと空ななながめそ戀しくば道遠くともはや歸り來
む

とぞ慰むる。

山(一)より、侍從の兄(二)の律師も出でたち見むとておはしたり。それも
いと心細しと思ひたるを、この手習どもを見て又書きそへたり。

あだにのみ涙はかけじ旅ごろも心のゆきて立ちかへるほ
ど

とは言忌(ことじゐ)しながら、涙のこぼるるを、荒らかに物いひ紛らはすも、さ
まざまあはれなるを、阿闍梨(三)の君は山伏にて、この人人よりは兄な
り、このたびの道のしるべに送り奉らむとて、出で立たるめるを、こ
の手習に又まじらはざらむやはとて書きつく。

立添ふぞうれしかりける旅ごろもかたみに賴む親のまも
りは

(一)比叡山延暦寺。
(二)爲相の同母兄、源承。
(三)爲相の同母兄、慶融。

女子(四)はあまたもなし。ただ一人にて、この近きほどの女院(五)にさぶ
らひ給ふ。院の姫宮ひととところ生れ給ふばかりにて、心づかひもま
ことしきさまにて、おとなしくおはすれば、宮の御方のこひしさも、
かねて申しおくついでに、侍從・大夫などの事、はぐくみおほすべき
由もこまかに書きつけて、奥に、

君をこそ朝日と賴めふるさとに殘るなでしこ霜に枯らす
な

と聞えたれば、御かへりもこまやかに、いとあはれに書きて、歌の返
しには、

思ひおく心とどめばふるさとの霜にも枯れじ大和なでし
こ

(四)紀内侍。
(五)龜山天皇の妃、新陽明門院。

（一）阿佛尼を母とする五人。
藤原爲家
└ 爲氏（母頼綱女）
├ 爲教（母同前）
├ 慶融（母阿佛尼）
├ 源承（母同前）
├ 爲相（母同前）
├ 爲守（母同前）
└ 紀内侍（母同前）

（二）京都から中仙道に出る門戸。

（三）滋賀縣栗太郡にある。

とぞある。

（一）いつつの子どもの歌、殘りなく書きつづけぬるも、かつはいとをこがましけれど、親の心にはあはれに覺ゆるままに、書きあつめたり。さのみ心弱くてはいかがとて、つれなく振りすてつ。

（二）粟田口といふ處より車は返しつ。ほどなく逢坂の關こゆるほどに、

さだめなきいのちは知らぬ旅なれどまた逢ふ坂とたのめてぞ行く

（三）野路といふ處は、來しかた行くさき人も見えず、日は暮れかかりて、いと物悲しと思ふに、時雨さへうちそそぐ。

打ちしぐれふるさと思ふ袖ぬれて行くさき遠き野路の篠はら

（四）滋賀縣蒲生郡にある驛。

（五）同縣野洲郡にある町。

（六）滋賀縣第一の長流で、上流は横田川といひ、三上山の麓を流れ、琵琶湖に注ぐ。

阿佛尼　藤原爲家の妻。初め安嘉門院に仕へたが、後薙髪して阿佛尼といふ。和歌に巧であつた。弘安六年（一九四三）鎌倉で歿した。

今宵は鏡（四）といふところにつくべしと定めつれど、暮れはてて行きつかず。守山（五）といふところに止まりぬ。ここにも時雨なほ慕ひ來にけり。

いとどなほ袖ぬらせとや宿りけむまなく時雨のもる山にしも

けふは十六日の夜なりけり。いと苦しくて臥しぬ。

未だ月の光はかすかに殘りたる曙に、守山を出でて行く。野洲川（六）渡る程、さきだちてゆく旅人の、駒の足の音ばかりさやかにて、霧いと深し。

旅人はみなもろともに朝たちて駒うちわたす野洲の川ぎり

（阿佛尼著「十六夜日記」による）

一四　菅公の左遷

醍醐の御門の御時、時平（一）のおとど左大臣の位にて、年いと若くておはします。菅原（二）のおとどは右大臣の位にておはします。そのをり、御門御年いと若くおはします。左右大臣に世の政行ふべき宣旨くださしめ給へりしに、そのをり、左大臣御年二十八九ばかりなり、右大臣の御年五十七八ばかりにやおはしましけむ。共に世の政をせしめ給ひし程に、右大臣はざえも世にすぐれ、めでたくおはしまし、御心おきても殊の外にかしこくおはします。左大臣は御年も若く、ざえも殊の外に劣り給へるによりて、右大臣御おぼえ殊の外におはしましたるに、左大臣安からずおぼしたるほどに、さるべきにやおはしけむ、右大臣の御爲によからぬこと出で來て、昌泰（三）四年正月

（一）藤原時平。
（二）菅原道眞。
（三）醍醐天皇の御代の年號。（一五五八―一五六一）

二十五日、太宰權帥になし奉りて流され給ふ。

この大臣の子ども數多おはせしに、女君たちは聟取りし、男君たちは皆程程につけて位どもおはせしを、それも皆かたがたに流され給ひて悲しきに、いとけなくおはしける男君女君たち、慕ひ泣きておはしければ、「小さきはあへなむ。」と朝廷も許さしめ給ひしかば、共に率て下り給ひしぞかし。御門の御掟、極めてあやにくにおはしませば、この御子どもを同じかたにだに遣はさざりけり。かたがたにいと悲しく思し召して、御前の梅の花を御覽じて、

東風吹かばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春なわすれそ

又亭（四）子の御門に聞えさせ給ふ。

流れ行くわれは水屑になりはてぬ君しがらみとなりてと

（四）宇多天皇。但しこの時は既に位を讓つて法皇となつて居られた。

どめよ

なき事によりて、かく罪せられ給ふを、からく思し歎きて、やがて山崎にて出家せしめ給ひてけり。そのほど極めて悲しきこと多かり。日頃へて、都遠くなるままに、あはれに心細くおぼされて、

君がすむ宿の梢をゆくゆくも隱るるまでにかへり見しは

や

又、播磨の國におはしましつきて、明石のうまやといふところに御宿りせしめ給ひて、うまやの長のいみじう思へる氣色を御覽じて、作らせ給へる詩いと悲し。

驛長無驚時變改、一榮一落是春秋。

かくて、筑紫におはしましつきて、ものあはれに心細く思さるる夕べ、をちかたにところどころ煙の立つを御覽じて、

夕されば野にも山にもたつけぶりなげきよりこそ燃えまさりけれ

又、雲の浮きて漂ふを御覽じても、

山わかれ飛びゆく雲の歸り來るかげ見るときぞなほ賴まるる

さりともと世を思し召されけるなるべし。月のあかき夜、

海ならずただよふ水の底までもきよきこころは月ぞ照らさむ

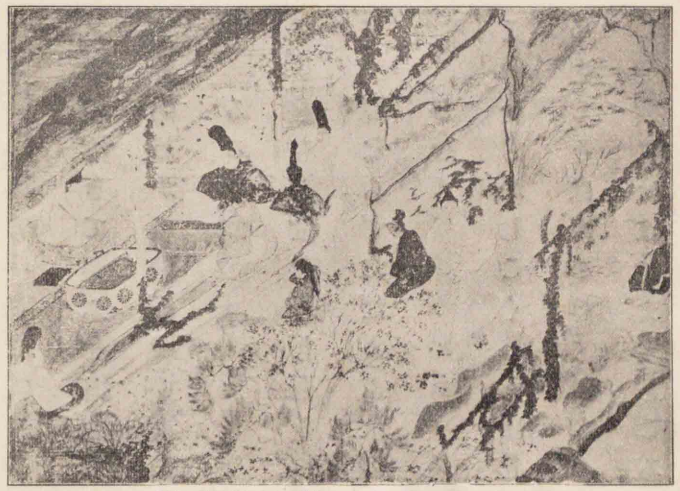
これいとかしこくあそばしたりかし。げに月日こそは照らし給はめとこそはあめれ。（中略）

筑紫におはしますところの御門もかためておはします。大貳の居處は遙かなれども、樓の上の瓦などの、心にもあらず御覽じやら

*太宰府都府樓附近の榎寺。

れけるに、又いと近く觀音寺といふ寺のありければ、鐘の響を聞し召して作らせ給へる詩ぞかし。

都府樓纔看瓦色、　觀音寺只聽鐘聲。



配處の菅公（藤原信實筆）

これは、(一)白居易の「遺愛寺、鐘敧枕聽、香爐峯、雪撥簾看。」といふ詩にもまさざまに作らしめ給へりとこそ、昔の博士どもは申しけれ。

又、かの筑紫にて、九月十日、菊の花を御覽じける序に、まだ京におはしましし時、(二)九月の今宵、内裏にて菊の宴ありしに、このおとどの作らしめ給へりける詩を、御門かしこく

(一) 支那の唐の詩人。

(二) 昌泰三年。

感じ給ひて、御衣賜はり給へりしを、筑紫にもて下らしめ給へりければ、御覽ずるに、いとどそのをり思し召し出でて作らせ給ひける、

去年今夜侍清涼、　秋思詩篇獨斷腸。
恩賜御衣今在此、　捧持毎日拜餘香。

この詩、いとかしこく、人人感じ申されき。この事ども、ただ散り散りなるにもあらず。かの筑紫にて作り集めさせ給へりけるを、書きて一卷とせしめ給ひて、(三)後集と名づけられたり。又折折の歌を書おきかせ給へりける、おのづから世に散りきこえしなり。（中略）

又雨の降る日うちながめ給ひて、

あめの下かわける程のなければや著てし濡れぎぬひるよしもなき

やがて、かしこにて失せ給へり。（著者未詳「大鏡」による）

(三) 菅家後集。

一五　大和民族の根本性

儒教や佛教の感化を蒙らないわが生粹の日本人の祖先は、色色な方面の性質を兼ね備へた、わだかまりのない、さつぱりとした人達であつた。無論、中にはさうでない人もあつたであらうが、大體に於てさう言へると思ふ。彼等には、男らしい、強い、剛壯なところもあつた。上品で、優しい、情に厚いところもあつた。又滑稽洒落な性質もあつた。さうして、明るい、清い、直なる心を以て仕事をして居つたのである。三種の神器はわが國民性の標章になるもので、鏡は明るい心を表し、玉は清い心を、劍は眞直な心を表して居る。我等の祖先はかやうな心を以て働いて、何か過があれば、その罪穢を祓つて、さつぱりと舊惡を忘れ、清清した心持になつて新生活に進み入つた。飽くまでも陽氣で、ひけ目を見せずに、前途の光明を追うた。大昔から朝廷で行はれた儀式の一つに、六月と十二月とに行ふ大祓といふのがある。これは六月の晦日と、十二月の晦日とに、親王から大臣・諸役人・民百姓に至るまで、總ての日本人が、半年の間に觸れ犯した罪穢を祈り祓ふといふ儀式である。その儀式に讀上げる祝詞の大祓詞の中に、

天津神は天の磐門を押開きて、天の八重雲をいつの千わきに千わきて聞し召さむ。國津神は高山の末、短山の末に登りまして、高山のいほり、短山のいほりを掻別けて聞し召さむ。かく聞し召してば、皇御孫命の朝廷を始めて、天の下四方の國には、罪といふ罪はあらじと、科戸の風の天の八重雲を吹放つことの如く、朝のみ霧、夕べのみ霧を、朝風、夕風の吹拂ふことの如く、大津邊に居る大

船を、舳とき放ち、艫とき放ちて、大海原に押放つことの如く、彼方の繁木が本を、燒鎌の敏鎌もちて打拂ふことの如く、殘る罪はあらじと祓へ給ひ清め給ふことを、高山の末、短山の末より、さくなだりに落ちたぎつ速川の瀨にます瀨織津媛といふ神、大海原に持出でなむ。かく持出で往なば、荒汐の汐の八百路の八汐路の、汐の八百會にます速開津媛といふ神、持ちかか呑みてむ。かくかか呑みてば、氣吹戸にます氣吹戸主といふ神、根の國、底の國に氣吹き放ちてむ。かく氣吹き放ちてば、根の國、底の國にます速佐須良媛といふ神、もちさすらひ失ひてむ。かく失ひてば、天皇が朝廷に仕へまつる官官の人どもを始めて、天の下四方には、今日より始めて、罪といふ罪はあらじ。」

と書いてある。卽ちこの儀式で、「半年の間に犯した罪や穢は、もう綺麗さっぱりとなくなつた。過去の罪穢に懸念なく、新しい心を以て進んで、世のために盡せ。」といふのである。この過去の罪惡に後髮を引かれずして、脇目も振らずに新しい道に入るといふ、中*根東里の所謂、「出づる月を待つべし、散る花を追ふ勿れ。」といふ思想は、大和民族の根本的性質の一つで、江戸つ子の洒落な性質なども、この國民性の遺つたものであらうと思ふ。

さてかやうに罪を祓つて、綺麗さっぱりとなつて、安心して暢氣に遊べと言ふのかと言ふに、必ずしもさうではない。寧ろ、かく綺麗さっぱりとなつた上は、明るい、淨い、直なる誠の心を以て、益〻進んで光明ある事業をなせと言ふのである。文武天皇の嘗て下し賜うた宣命の中に

明き、淨き、直き、誠の心もちていや進み進みて、緩み怠ることなく

*儒者。伊豆下田の人。陽明學の大家。明和二年（一七六五）歿、年七十二。

務めよ。

と仰せられたのがある。實に立派な御詞であつて、前の大祓の祝詞と、この文武天皇の宣命とは、ともに大和民族の長へに肝銘すべき座右の銘である。

かやうに、強い處、優しい處、しやれた處を兼ね備へ、明るい、清い、眞直な心を以て、積極的に、ひけ目なく、事業をなした人は、大昔の世に少なからずあつた。素盞嗚尊もさうであつた。大國主命の如きもさうであつた。大國主命が邪惡な兄君にはいぢめられ、父君にはさいなまれ、自然と戰ひ、蠻族と戰つて、出雲朝廷を建てられたのは、なかなか容易な事業ではなかつた。しかも、その間にあつて、始終、善い、正しい、光明のある事業を目的として進まれたのは、實にこの國民性を實現せられたものである。神武天皇も此等の民族的美質を遺憾なく發揮せられた御方である。日本武尊も亦さうである。日本武尊は非常に眉目秀麗な御方であつた。しかも武勇絶倫な御方であつた。父帝の命によつて、千里を獨往して、筑紫に熊襲の巨魁を誅戮せられ、大功を建てて都に歸られると、直に又東夷の征伐を命ぜられて打立たれた。程なく東夷を平定されての歸るさに、伊吹山の山靈の毒氣に中つて、伊勢で薨去されたが、薨ずる時にも、なほ陽氣な、積極的な光明性を失はずして、名高い「國思の歌」を詠まれた。

命の全けむ人はたたみこも平群の山の熊樫が葉を髻華にさせその子

しかも、薨じて後に、尊の御靈は白鳥となつて天翔つて行かれたといふことである。

日本武尊は實に武勇も優れ、智慧も優れ、文藝の才もなかなか優

(一) 滋賀縣坂田郡にある山。
(二) 「古事記」中卷に見える。
(三) 奈良縣生駒郡にある山。

れて居られた。さうして、明るい、清い、眞直な誠の心を以て、君のため、國のために盡され、艱難辛苦の間にあつて、撓みなく進まれた。此等の點は皆それぞれに尊いのであるが、私の特に有り難いと思ふのは、この「國思の歌」である。既に死に臨みながら、遙かに故里人に言寄せて、「命の全い健かな人は、くよくよせずに、平群の山に茂つて居るあの熊樫の葉を髪にかざして、陽氣に遊び樂しめ、故里人よ。これ我が今はに臨んで、お前達に望む所である。」と詠まれたのはその積極性・光明性、進んで已まない、ひけ目を見せない心持が見えて、實に有り難いではないか。儒佛の思想に累はされた後世の人間ならば、「亡き後に一返の回向を賴む。」とか、「生ある者の死ぬるのは據ない。」とか言ふでもあらうが、神ながらの純粹の大和心を以て、「死ぬるものは死ぬ。俺は仕方がないが、達者なものは大いに陽氣に遊ぶが好い。」と言つて居られる。今の言葉で言ふならば、飽くまでも生を樂しみ味はふが好いといふので、實に愉快な有り難い事を詠まれたものである。

私は、もう一つこの熊樫の葉をかざすといふ事に非常な興味を感じて居る。後の王朝の公卿達は、

ももしきの大宮人はいとまあれや櫻かざして今日も暮し*つ

といふ歌の示すとほり、仕事の無いままに、陽氣に櫻をかざして、今日も明日もと遊び暮したものであつたが、日本武尊は兵馬倥偬の世にあつて、熊樫の葉をかざして遊べと仰せられたのである。櫻は美しい花ではあるが、脆い、はかない花である。樫の葉は面の艶は無いけれども、厚い、堅い、霜雪に堪へる堅實な物である。まづ西洋の月

*「新古今和歌集」に出てゐる山部赤人の歌。

桂樹そつくりと言つてもよい。月桂樹も結構である、櫻も結構である。けれども、私はそれよりも、二千年前に日本武尊の御歌に現れた熊樫の葉が、一層大和民族の心持を標章するに適して居ると思ふ。熊樫を櫻の花と相並べて、日本の標章にしては何うであらう。殊に日本武尊の薨後、その御靈が白鳥となつて大空高く天翔つて行かれたといふのであるから、日本武尊を背景として、樫の葉に白鳥を配し、これをわが國民性の主要な一面、殊に文藝の方面の標章としては何うであらう。

とにかく、太古の日本人は、堅い、柔かい、強い、優しい、男性的、女性的、勇壯・雅麗、色色な方面の性質を備へ、さうして明るい、清い、直な心を以て、飽くまでも陽氣に、積極的に進んで仕事をするといふ質であつた。（五十嵐力著「作文三十三講」による）

五十嵐力　文學博士。國文學者。早稲田大學出身。現に同大學教授である。

一六　日本文藝の一特質

日本は世界の故國である。殊に抒情的文藝の發達に於ては、世界の如何なる國よりも、遙かに早く發達してゐるのである。かの西洋紀元十世紀に顯れた「古今集」や、十一世紀に出來た「源氏物語」などは、西洋にも、東洋にも、絶えて比類のない、頗る寫實的に、頗る自然に、人間の日常生活と、極めて陶冶せられた感情とを描寫したものとして、世界に誇るに足るのである。希臘や、羅馬や、支那や、印度は、なる程これより以前にも許多の文藝上の作物を出してゐるが、或は荒唐無稽な傳奇や、皮相的な史實の記錄や、道德・哲學・宗教・政治などの理智や意志に關する產物のみで、純乎たる感情の敍述として人類の殘した最も古い最も立派な文藝は、日本人のみの所產であつたと

言つて差支ないのである。

西の國の古詩は、みな神話・傳說である。然らざれば讃美歌である。よしや希臘の昔にも少數の人情を詠じた詩があつたと言つても、わが「古今集」のやうに、それが主體をなしてゐるものとは較べられない。支那には所謂淸風朗月の吟もないではないが、然もその詩人は悉く政治に失脚した人人で、物に託して慷慨の餘憤を漏らしたものであつた。全く利害の情や理智の念を外にして、眞に天然の美に對する憧憬の情を謠つたのは、日本の詩人に限ると言つてよからう。但し、等しく人間界の所產である。日本人の歌もその人情を謠ふことに於て西洋の詩に似てゐ、又その淸風朗月を愛することに於て支那の詩に相通ふものが無いではない。併し、そこにも題材の相似てゐると言ふことは認められるが、之に對する心持には大い

に懸隔したものがあると思ふ。

西洋の詩人が人情を謠ふのは、常に人事の葛藤としてである。その才子佳人は、何處までも血の通つてゐる人間であつて、美しい天然物ではない。然るに、日本の古詩人は全く人事と天然とを同一視してゐる。

(一)いざ櫻われも散りなむひとさかりありなば人に憂きめ見えなむ

(二)色見えでうつろふものは世の中の人のこころの花にぞありける

(三)さくら花とく散りぬともおもほえず人のこころぞ風もふきあへぬ

爛漫たる櫻花を見る毎に人の心の移り易いのに聯想し、衰へ易

(一)「古今集」。雲林院にて櫻の花をよめる。(そうぐ法師)

(二)「古今集」。題知らず。(小野小町)

(三)「古今集」。櫻の如くとくちる物はなしと人のいひければよめる。(紀貫之)

い人生の姿を直に九十の春光の過ぎ易いのと同視する。その客觀と主觀とをただ一對象のやうに感ずる心持は、人間社會の憤怒とか執著とか言ふものとは全く懸離れた、純潔な高雅な情味ではないか。だから、好んで人情を謠つた歌人でも、權利とか、自由とか、教訓とか、哲學とか、宗教とかいふものは殆ど謠はなかつた。(一)チャンバレーンは我が國の古歌を評して、此等の人間味に乏しいことを甚だ物足らず感じたやうで、「ただ人間の自然の感情が描かれてゐるのみで、何物も此等の歌から誨へられない。」と呟いてゐる。併し、チャンバレーンは、そこに人間の感情が斯くばかりに純化せられ得るものので、かく純化せられた感情は、人間の社會を全く美しい天然界として觀ることを得るといふ一大教訓を見落したのである。

支那の詩人も、時とするとかの清風朗月の間に自己を沒入する

(一) Chamberlain. (1850—) イギリス人。日本文學を研究し、「日本文學史」の著がある。

事を知つてゐる。嘗て夏目漱石は陶淵明(一)の「採菊東籬下、悠然見南山。」の句を評して、「只それぎりの裏に、暑苦しい世の中を丸で忘れた光景が出てくる。垣の向うに隣の人が覗いてゐる譯でもなければ、南山に親友が奉職してゐる次第でもない。超然と出世間的に、利害損得の汗を流し去つた心持になれる。」と言ひ、更に「獨坐幽篁裏、彈琴復長嘯。深林人不知、明月來相照。」といふ王維(三)の絶句を評しては、「只その裏に優に別乾坤を建立してゐる。この乾坤の功德は、不如歸(四)や金色夜叉(五)の功德ではない。汽船・汽車・權利・義務・道德・禮儀で疲れ果てた後、總てを忘却して、ぐつすり寢込むやうな功德である。」と言つた。げに支那の詩人の作物は、この疲勞の後の樂寢といふ趣がある。天然の間に沒入してはゐるものの、天下國家のための經綸に失望して、故意に隱遁閑居したといふ姿は、何處までも殘つてゐる。そこで五柳(六)

(一) 晉の詩人。
(二) 唐の詩人。
(四) 德富蘆花の小說。
(五) 尾崎紅葉の小說。
(六) 陶淵明をいふ。

先生の閑居は、隣人の覗くことを許さない。王維は強ひて人氣のない幽篁を深林の裏に求めた。寢殿の東面に、小半蔀の御簾の色めいた袂と、前栽の落花とを詠めながら、なほ且つこの暑苦しい世の中を忘れて、この佳人とその落花とを同じ美しい天然物と觀じつつ、悠悠として權利・義務の外に遊んでゐた大宮人は、隱遁的な詩人と頗るその撰を異にしたものと言はねばならぬ。

大宮人も固より成らぬ戀に悲しみ、遂げざる恨に泣いた。併し、その悲しみも、その恨も、月の入るを歎き、花の散るを惜しむ涙と同じ涙である。落花を慕つた鶯の涙は、永き冬の日に凍りはてて、垂氷となつて居るだらうとさへ想像せられたが、しかも春風駘蕩として南枝漸く綻びそめると、鶯の涙の氷は直に解けそめるのである。世には永遠の悲しみは無い。過去は過去に葬り去つて、未來は佛陀の

（六）雪の中に春は來にけり鶯の氷れる涙今や解くらむ（「古今集」二條の后）

引接に任せてゐる。この現在の刹那刹那を樂しく美しい色と香とに醉うて、ここに歌人の別乾坤を造つてゐた。

されば、「源氏物語」や「枕草子」や、王朝の最盛期に出來上つた文藝の最も美しいものは、固より人間の情熱を一の主要な題材としてゐるにも拘はらず、近代小説のやうな、暑苦しい、息の詰まるやうな、不愉快な、壓迫されるやうな氣持を起させるものではない。譬へば、霞がくれに胡蝶の戯れるやうで、或は杜鵑の聲の恨を帶びたる、或は卯の花くたしの陰鬱なる、或はたまたま物凄き雷電の閃きはあつても、やがて澄みわたる明月の趣を顯し來つて、何處までもかの歌人の創造した別乾坤を離れない。殊にその人を描き、事を敍するにも、美しい天然の背景を假り來るのが常であつて、その人も、その事も、一の天然現象のやうに活動してゐる。ちやうど住吉派の繪畫を

見るやうに、その山も、その河も、その人も、その花も、同じ線で、同じ調子で描かれてゐる。かくの如きものは、確にわが古文藝の一特色である。畢竟日本人の所謂風流心といふものは、取りも直さずこれである。

香川景樹[一]がその「古今集正義」の序に、日本の和歌を支那の詩に比較して、和歌は清淨なる性情より出でて、思慮義理（卽ち理窟）に渉らないものであると言つて、わが國の水の清淨なるに譬へ、支那の詩はその水の溷濁なるが如く濁つてゐて、人間の私の義理を混じてゐると說いたのは、頗る抽象的な空論のやうではあるが、實は敍上の眞相を見究めたものと言つてよからう。

又松尾芭蕉[二]がその俳道卽ち風雅を說明して、「造化[三]に從ひて四時を友とす。見るところ花にあらずといふ事なし。思ふところ月にあらずといふ事なし。かたちは、花にあらざる時は夷狄に等し。心、花にあらざる時は鳥獸に類す。夷狄を出で、鳥獸を離れて、造化に從ひ、造化に歸れとなり。」と言つたのも亦、中古の歌人と同じ思想である。その花といひ、月といふのは、美しい天然の義であるが、しかもその吟ずる所は、決して狹い意味の花鳥風月ではなかつた。その俳諧は實に人事の一切に渉つてゐて、廣く社會の見聞を集める爲に、或は旅行を勸めて、「東海道[四]の一筋も知らぬ人は、風雅に覺束なし。」といひ、或は名高い乞食袋の敎を殘して、一切の見聞を、恰も乞食が物を拾ひ集めるが如く、その詩囊に藏して、悉く俳諧の材料にせよとさへ敎へて居る。これを實例に見ても、詩人や、畫工や、大宮人や、燈臺守のやうな、所謂詩的の人のみならず、田舍巡りの小商人、齒磨賣の居合拔、さては拾うた金で疊の表がへをする男や、年貢の未進に苦しむ百姓、

（一）江戸時代の末に出た歌人。
（二）元祿時代に現れた俳人。
（三）元祿元年の「芳野紀行」中に見える文。
（四）芭蕉の弟子森川許六の「旅賦並引」といふ俳文の中に芭蕉の言葉として記されてゐる。

隣へも内證で嫁を迎へる貧乏人までが、等しく詩材になつてゐて、しかもそれがために、毫もその風雅の趣致を妨げる所がないのである。されば、斯くの如き俗界の觀察も、之を芭蕉から見れば、亦「月を見、花を思ふ。」のであつた。その俗界が、芭蕉の眼には詩的な自然界と見なされてゐたのである。宛も中古の歌人が、人間の情熱を櫻花の開落と同一視してゐたやうに。故に、芭蕉は「子に飽くと申す人人は花もなし。」とも説いてゐる。

かく人間を離れないで、しかも能くかの暑苦しい我欲の俗念を脱却し、この社會から隱退する事なしに一種の風雅なる別天地を造ると云ふのが、所謂風流の精髄ではなかつたらうか。かの愛兒を蹴飛ばして芳野山に隱栖を求めたと傳へられる西行法師や、殊更に方丈の庵を結んで、自らこの社會と交通を絶たうとした鴨長明

(一) 平安朝時代の末から鎌倉時代の初にあらはれた歌僧。
(二) 源平鬪爭の亂れたる當時にあらはれた人。

の如きは、この意味の風流とは、稍その趣を異にして、寧ろ支那の詩人に近い者といふべきである。

正眞の風流心の修養を經た人には、その感情が十分に陶冶せられてゐて、常に自己の運命を客觀視する餘裕がある。隨つて、如何なる場合にも、くよくよともしなければ、狼狽もしない。物の姿を如實に靜かに眺め得る。

散る花に南無阿彌陀佛と夕べかな

といふ辭世の心持は、取りもなほさず、自己と落花とを同一視し得た境地ではないか。

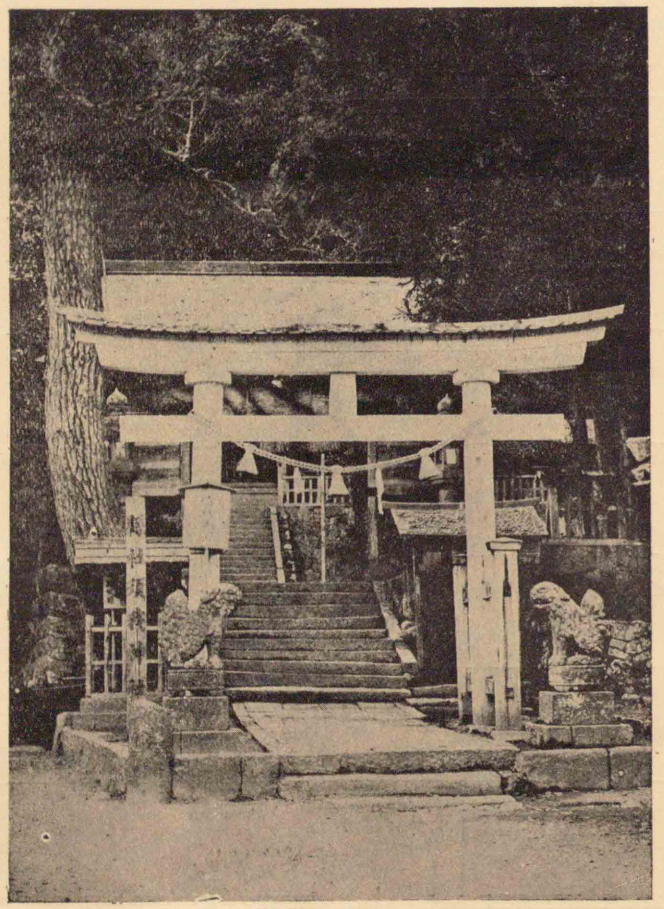
我我が當來の青年を敎養する上に、風流心といふ事によつて指導すべきものは、或は寧ろこの點ではなからうか。かの一時流行した生活難問題や、さてはこれに續いて現れた神經衰弱性の自然派

(三) 荒木田守武の句。

の小說、卽ち彼の喪家の狗が食を求めて喘ぎ廻つてゐるやうな、所謂敗殘の徒輩ばかりを描いたものの如きは、この風流心とは正反對の傾向と見るべきで、我が國民性とは決して同化するものでならうと思ふ。ただ徒に新奇を好む青年に對しては、多少の警戒を要することであらう。

由來かの風流心なるものは、强烈な憎惡・反撥・破壞・絕望などの念を超脫したものであるから、とかく青年に歡迎せられ易い悲痛・激越の調には乏しい。在來の詩歌が、動もすると青年にとつて無味平板に感ぜられるのは、多くの青年がその平韻・穩雅の調に慣れないのが主たる原因である。幽かな、淡き、細かき、しかも言ひ知れぬ深みのある味は、ただ懇切なる指導と相待つて、反復玩味することに依つてのみ窺はしめ得るのであらう。

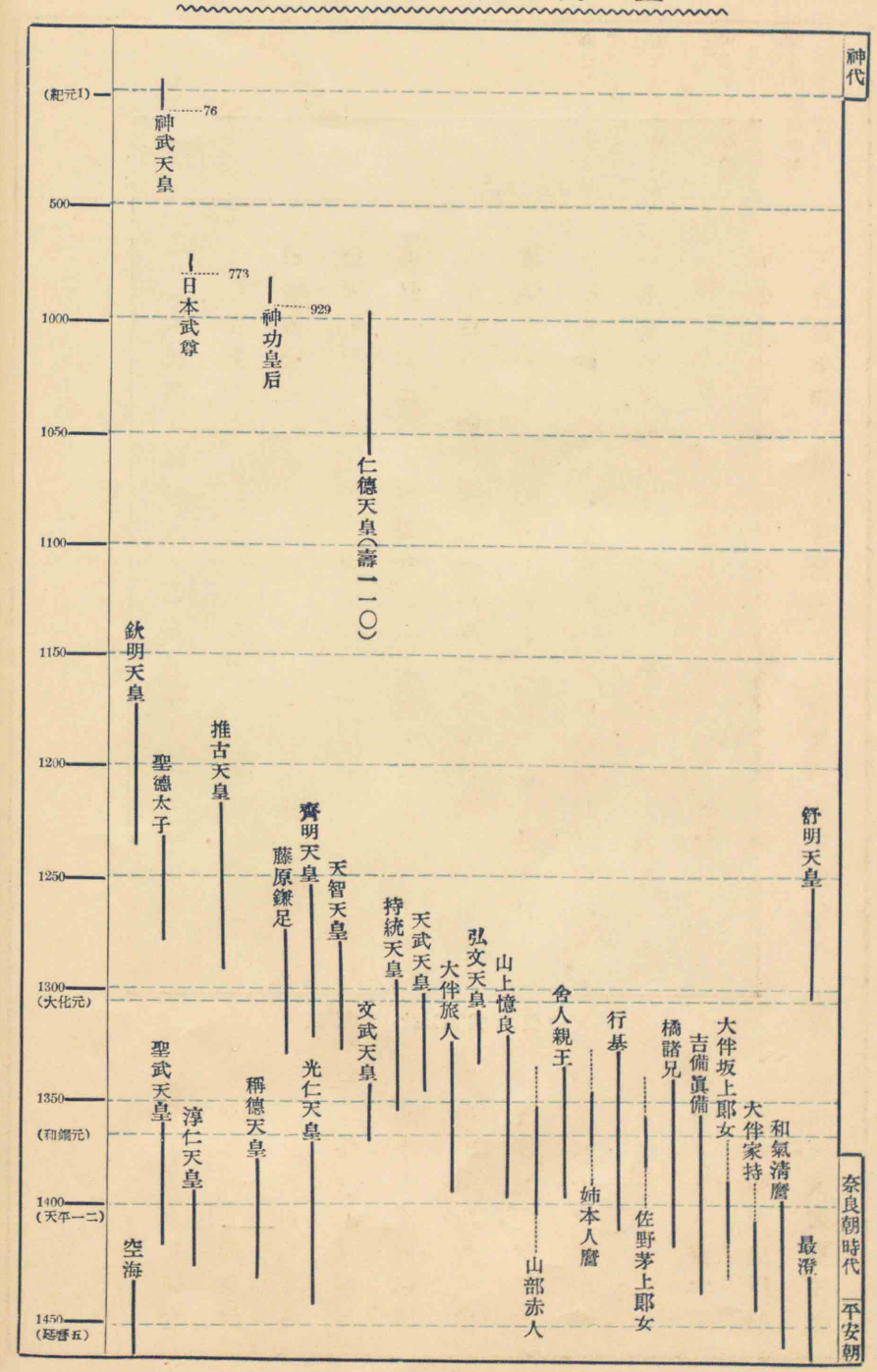
本文は編者佐佐政一の作で、「醒雪遺稿」中に收めてある。



須我神社（出雲須賀宮）

上代文選

上代文學年表



○ 萬葉集に就て

日本民族には、神代の昔から、思ふ所を歌謠に現して相唱和するといふ習はしがあつた。その神代の歌謠の今に傳はつてゐるものを見ると、皆簡素・清純で、眞情が流露してゐる。その流が子孫に傳はつて、形にも心にも自らなる發育をなし、紀元千三百年代の半ば頃になると、作歌の衝動に藝術的意識が明瞭に加はつて、所謂歌人・作家とも言ふべきものが輩出し、其等の勢と相待つて、當時一般に、歌の命が高さ深さ豐かさの頂上に達したかの觀がある。萬葉集二十卷は、その頂上期を中心として、前後百二三十年に亙る間の歌を主として輯めたものであつて、千數百年間に現れた多くの我が國の歌集中、唯一最高の權威をもつて、古今歌界の上に臨んでゐるものである。

詳しく言へば、「萬葉集」は、仁德天皇の御宇(一)より淳仁天皇の御宇(二)(天平寶字三年)まで、凡そ四百五十年に亙る間の歌を輯めたものであるが、舒明天皇(三)以前三百餘年間の歌は甚だ少なく、以後百餘年間の歌が多く、特に天武天皇(四)の御

(一) 御在位八十七年間。(九七三—一〇五九)
(二) 御在位七年間。(一四一八—一四二四)
(三) 御在位十三年間。(一三八九—一四〇一)
(四) 御在位十四年間。(一三三三—一三四六)

宇以後七八十年間の歌が最も多いのである。試みに期を以て分てば、舒明天皇より天武天皇に至る五六十年間が初期と言ひ得べき時期であつて、朝廷が主として明日香(一)にあつた時代である。この時代の歌は上古の素樸な歌風を繼承して、原始的な強さと太さとを持つて居り、子供の如き率直さと自由さとを持つてゐて、「萬葉集」全體の素質的方面を最も顯著に現してゐる時期である。形から言へば繰返しの句が多く、調子から言へば直線的で大きく、心から言へば概ね一途に無邪氣である。

第二期は、天武天皇より續いて持統(二)・文武(三)兩天皇を中心とした二十年程の間であつて、朝廷が主として藤原(四)にあつた時代である。この期は前期の歌風に現れたる原始的素質を推進めて、更に藝術としての崇高なる境域に到達し得た時期であつて、年數は短いけれども、「萬葉集」の頂上期と稱すべき時である。この期に至つて、始めて作家・歌人とも言ふべきものが現れた。時代の大勢が自らにして生んだのであつて、巨頭に柿本人麿(五)・山部赤人(六)などがある。人麿と赤人とは、「萬葉集」中の巨頭なるのみならず、わが國上下數千載に亙つて

(一) 今の奈良縣高市郡飛鳥村大字飛鳥。允恭天皇の皇居があつた。
(二) 御在位十年間。（一三四七―一三五六）
(三) 御在位十一年間。（一三五七―一三六七）
(四) 奈良縣高市郡飛鳥村大字小原の古名。
(五)(七)(八)(九) 次章參照。

の巨頭である。かかる巨人を生んだのに見ても、當時の一般の歌風の趨勢を想見することが出來るのである。

第三期は所謂奈良朝の時代であつて、年數は五十年程である。この期は、第二期の歌風の高揚した勢を繼承して、更に多くの作家を輩出し、「萬葉集」中最も歌の數の多い期間と思はれるのであるが、往往にして原始的素質から離れて形骸に捉はれようとし、忠實な寫生から離れて觀念的な歌ひぶりに陷らうとする傾向も見え始めてゐる。山上憶良(七)・大伴家持(八)などはこの期の代表作家であるが、この二人の歌にもその傾向があり、特に家持の歌の或者は、後の「古今集」への橋渡しをする觀のあるものさへ見えてゐる。この期は「萬葉集」中の末期と稱してよい。併しながら、この期を通じて「萬葉集」中の秀逸も可なり多く現れて居り、殊に狹野茅上娘子(九)の如きは、「萬葉」時代の末端に出現して、女性作家のために虹の如き氣を吐いてゐるといふ有樣であつて、一概に衰退期などとは言ひ去れないこと勿論である。

これを要するに、「萬葉集」全體を通じて、歌の命の高揚してゐることは後世

比すべきものなく、作歌の心が常に一點に集中し、現れるところは緊張の聲調、至純の風格、高古の匂、圓融の相となつて、藝術の高處に澄入つてゐるのであつて、世にこれを萬葉調と呼ぶのである。歌の數は、「袋(一)艸子」に四千三百十三首とあり、「代(二)匠記」に四千五百十五首とあり、「古(三)義」に四千四百九十六首と數へてあるのは、傳本に相違があり、類歌の見方に意見の違があるからであらう。大體を四千五百首と見てよい。

撰輯者は古來橘(四)諸兄説あり、大伴家持續撰説あり、鎌倉時代の僧(五)仙覺は兩人を撰者とし、江戸時代の初期に、僧(六)契沖は家持を撰者とし、その説は久しく定説となつたが、今日では家持以外に猶數人の手を經たものが合せられたものといふ説が有力である。

「萬葉集」の書方は、所謂萬葉假名であつて、國訓を寫すに總て漢字を以てしてゐる。それゆゑ、後世難訓の書となり、既に村上天皇の天曆年中に、源(七)順等が敕を受けて訓を施したことがあり、又藤原道長その他多くの人人が、永年に亙つて順次に訓點を施したこともある。前者を古點といひ、後者を次點といふ。更に下つては、仙覺が十數種の傳寫本によつて校合をし、古來訓み難しとされてゐた百五十二首に訓を施した。これによつて訓點上の段落を見るに至つた。これを新點といふ。併し、訓點の事業は德川時代の學者より今日の學者にまで遺されてゐる至難の業であつて、「萬葉集」中の或歌は依然として難訓として今日に遺つてゐるのである。

元來「萬葉集」は筆寫本として後世に傳はつたのであつて、活字本若しくは木版本として印行されたのは德川初期以來のことである。それゆゑ、古來の寫本中、古きは湮滅し、或は脫離し、時代の後れたるは誤多く、寫本によつて樣樣の傳へ方をしてゐるのであつて、歌の正體の見定め難いものが可なりある。それを見定めるのには、成るべく時代の古い寫本を多く輯めて、校へ合せる外はないのであるが、古寫本と言うても、平安朝末期より以前のものは一つも現存してゐないのである。近頃佐(八)佐木信綱・橋(九)本進吉・千(一〇)田憲・武(一一)田祐吉・久(一二)松潛一の五氏が、現存古寫本その他後世の權威ある萬葉研究書を網羅して、その異同を明かにするため、十三年の歲月を費して「校本萬葉集」を公にされ

(一) 四卷。平安朝時代末期の歌人、藤原清輔の著。歌學・歌書・歌人などに關することを記したもの。
(二)(三) 本卷一一四頁の本文並に頭註參照。
(四) 元明・元正・聖武・孝謙の四朝に歷仕した。天平寶字元年(一四二七)歿、年七十四。
(五) 鎌倉時代中期の學僧。
(六) 學僧。元祿十四年歿、年六十二。
(七) 歌人。永觀元年(一〇四三)歿、年七十三。
(八) 文學博士。長らく東京帝國大學講師であつた。
(九) 現に東京帝國大學教授。
(一〇) 現に神宮皇學館教授。
(一一) 文學博士。現に國學院大學教授。
(一二) 現に東京帝國大學助教授。

たのは、學界のために多大の貢獻をなしたものであつて、仙覺の訓點大成と併稱すべき偉功である。

「萬葉集」の註釋は、大體、仙覺の「仙覺抄」に始まると見てよい。德川時代に入つて、北村季吟の「拾穗抄」、下河邊長流の「菅見」、契沖の「代匠記」、荷田春滿の「童蒙抄」、賀茂眞淵の「考」、本居宣長の「玉の小琴」、加藤千蔭の「略解」、橘守部の「墨繩」及び「檜嬬手」、岸本由豆流の「攷證」、鹿持雅澄の「古義」などがあり、明治以後、木村正辭の「美夫君志」、佐佐木信綱氏の「選釋」、折口信夫氏の「口譯萬葉集」などがあつて、各、特殊の立場を以て萬葉研究者を裨益してゐる。

集中の作者としては、上は天皇・皇后諸皇族を始として、群臣より田夫・野人に至り、下つては遊行女婦・乞食にまで及んでゐる。然も、それが皆萬葉調といふ歌風に於て相一致してゐるのは、當時作歌の心理が痛切なる現實に卽し、純眞なる感動に卽するに於て相一致してゐたためであつて、作歌心理が眞劍な態度に立つ時、階級差別の如き閾は自然に通り越して、赤裸裸なる人間性に歸するのであらう。けれども、それ程の赤裸裸なる態度に立ちながら、猶

(一)寶永二年歿、年八十二。
(二)貞享三年歿、年六十三。
(三)元文元年歿、年六十九。
(四)明和六年歿、年七十三。
(五)享和元年歿、年七十二。
(六)嘉永二年歿、年六十九。
(七)弘化三年歿、年五十八。
(八)安政五年歿、年六十八。
(九)文學博士。東京帝國大學教授。大正二年歿、年八十七。
(一〇)現に國學院大學並に慶應義塾大學の教授。

且つ、天皇は天皇としての品格を歌柄の上に備へられ、臣民は「大君は神にしませば」と歌うて、天皇を現人神と尊崇したのに見ても、わが國の君臣關係の根柢たる處を窺ひ得るのであつて、かやうな方面から「萬葉集」を見ることは、國體又は國民精神を研究する者に大切な鑰を與へるものであり、「萬葉集」全體が、日本民族のあらゆる階級者の眞劍なる感情の表示である點に於て、我等が祖先の心理研究を目的とする學者に裨益を與へることも多大であらう。これを要するに、「萬葉集」二十卷はわが國の上古數百年に亙る民族的歌集であつて、純文學としての價値は勿論、その他の樣樣な方面から日本民族を研究せんとするもののためにも、儔罕なる寶典である。

(島木赤彥著「萬葉集の鑑賞及び其批評」による)

島木赤彥　歌人。本名は久保田俊彥。長野縣の人。長野縣立師範學校出身。正岡子規の門下。大正十五年歿、年五十一。

柿本人麿 歌人。持統・文武の兩朝に仕へて微賤の官に任ぜられた。委しい傳記は未だ分らない。

(一) 吉野川の上流の古名であらう。

一　たぎつ河内

○

幸吉野宮時作歌　　柿本人麿

安見ししわが大君神ながら神さびせすと吉野川たぎつ河内に高殿を高知りまして登り立ち國見をすれば畳なはる青垣山の山神のまつる御調と春べは花かざし持ち秋立てば紅葉かざせりゆふ川の神も

安見知之吾大王神長柄神佐備世須登芳野川多藝津河内爾高殿乎高知座而上立國見乎為波畳有青垣山山神乃奉御調等春部者花挿頭持秋立者黄葉頭刺理一云黄葉遊副川之神母大御食爾仕奉等上瀬爾鵜川乎立下瀬爾小網刺渡山川母依氐奉流神乃御代鴨

萬葉巻一　十九

古版萬葉集

山上憶良 遣唐少錄・伯耆守などに歴任。天平五年（一三三）歿、年七十四。

(二) 釋尊の嫡子の名。後に釋尊十大弟子の一人となつた。

大御食に仕へまつると上つ瀬に鵜川を立て下つ瀬に小網さし渡す山川もよりて仕ふる神の御代かも

反歌

やまかはもよりて仕ふる神ながらたぎつ河内に船出せすかも

○

思子等歌一首幷序　　山上憶良

釋迦如來、金口正説、等思衆生、如羅睺羅。又説、愛無過子。至極大聖尚有愛子之心。況乎世間蒼生、誰不愛子乎。

瓜はめば子どもおもほゆ栗はめばましてしぬばゆいづくより來りしものぞまなかひにもとなかかりてやすいしなさぬ

反歌

しろがねもこがねも玉もなにせむにまされるたから子にしかめやも

○

望不盡山歌一首并短歌　山部赤人

天地の分れし時ゆ神さびて高く貴き駿河なる富士の高嶺を天の原ふりさけ見れば渡る日の影もかくろひ照る月の光も見えず白雲もいゆきはばかり時じくぞ雪は降りける語りつぎ言ひつぎ往かむ富士の高嶺は

反歌

田子の浦ゆ打出て見れば眞白にぞ富士の高嶺に雪は降りける

○

山部赤人　聖武天皇に仕へ、聖駕に從つて各地を巡つたことのある人。

慕振勇士之名歌一首并短歌　大伴家持

ちちの實の父のみことははそ葉の母のみことおほろかに心つくして思ふらむその子なれやもますらをや空しくあるべき梓弓すゑふりおこし投矢もち千尋射わたし劍太刀腰にとり佩き足曳の八峯ふみ越えさしまくる心さやらず後の代の語りつぐべく名を立つべしも

反歌

ますらをは名をし立つべし後の代に聞きつぐ人も語りつぐがね

○

輕皇子宿于安騎野時作歌　柿本人麿

ひんがしの野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月か

大伴家持　旅人の子。仕へて陸奥按察使鎮守府將軍にまで累進したが、常に大伴氏の衰微を歎き、氏勢挽回に焦慮し、爲に藤原氏に忌まれ、その一生は不遇であつた。延曆四年（一四五）歿。

（一）後の文武天皇。
（二）今の奈良縣宇陀郡神戸村附近の野。

大伴坂上郎女 安麿の次女。大伴駿河麿の妻。神龜五年兄旅人に從つて筑紫に往き、天平二年京に歸つた。

小野老 太宰少貳に任ぜられた人。

たぶきぬ

山部赤人

○

春の野にすみれ摘みにと來しわれぞ野をなつかしみ一夜寢にける

○

與(タル)姪(ノ)家持(ガリ)從(ニ)佐保(ニ)還(リ)歸(スルニ)西宅(ニ)歌一首

大伴坂上郎女

わがせこが著(ケ)る衣うすし佐保風はいたくな吹きそ家に到るまで

○

小野老

青丹よし寧樂のみやこは咲く花のにほふがごとく今さかりなり

高橋蟲麿 天平・寶龜年間の人。

大伴旅人 安麿の子。左將軍・中務卿・中納言・征隼人持節大將軍・太宰帥・大納言等に歷任。天平三年（一三一）歿、年六十七。

持統天皇 第四十二代。天智天皇の第二皇女。天武天皇の皇后。大寶二年（一三二）崩御、壽五十八。

天智天皇 第三十八代。舒明天皇の皇子。御在位十年（一三三）崩御、壽五十八。

○

千よろづのいくさなりとも言擧(コトあ)せずとりて來ぬべきをのことぞ思ふ

高橋蟲麿

○

人もなきむなしき家はくさまくら旅にまさりて苦しかりけり

大伴旅人

○

春過ぎて夏來たるらししろたへのころもほしたり天のかぐやま

持統天皇

○

わたつみの豐旗雲にいり日さしこよひの月夜さやにてりこそ

天智天皇

（「萬葉集」による）

○古事記と國家的精神

「古事記」はわが國の古典中で最も複雜な性質を有してゐて、單一の視點に立つて見ることの困難な作品である。「萬葉集」や「源氏物語」の如く、純粹に文學として見ることも元より可能であるが、「萬葉集」や「源氏物語」は純粹に文學として見ることが唯一の中心視點であるとも考へられるのに、「古事記」には更に多方面の視點がある。歷史として、古代宗教として、神話として、その他多くの視點がある。かく學問的對象の上で複雜さを有すると共に、「古事記」には少年の胸にも或親しさを與へるものがある。我我は少年の頃、鰐をだました兎が大國主命に救はれた說話を聞いて、深い興味を覺えた。又、素戔嗚尊の八岐大蛇を退治した事件を、さては日本武尊の熊襲征伐や蝦夷征伐やの物語を、どんなに感激を以て聞いたであらう。かういふ說話は總て「古事記」に見えるのである。少年の頃には「古事記」に此等の說話があるとは意識してゐなかつたが、我我は「古事記」のもつ素材や內容などは、少年の頃に既に深く腦裏に印してゐたのである。かうして「古事記」の中には少年時代の夢と憧憬とを十分に滿足させるものがあるのである。

而も、我我は今日に於て、「古事記」の中に幾多の學問的對象としての問題を見出す。現に、素戔嗚尊とは如何なる神であるか、又八岐大蛇とは何であるかといふ點になると、學問的に見て未だ判然とした解決はついてゐない。卽ち少年の心には無心に取入れられた世界も、批評的精神を以て入れば入るほど複雜になるのが「古事記」である。單純なやうで、無限の複雜さを湛へてゐるのが「古事記」である。けれども、複雜ではあるが而もそれを統一する精神を明確に摑むことの出來るのも「古事記」である。

然らば「古事記」の內容は如何なる點によつて統一されてゐるかと言ふに、神と英雄とを中心とした國家的精神によつて統一されてゐると思ふ。元より「古事記」は敍事的な文學であり、客觀的な表現をなしてゐて、主觀的にこの精神が說かれてゐるのではない。皮相的に見れば、「古事記」には素樸な原始生活がそのままに現れてゐるに過ぎないやうである。兎と鰐との話、大蛇退治

や、兄弟爭をして海宮に針を取返しに行つた說話など、そこに何うして國家的精神が見られるかと思はれもしよう。勿論その部分的表現の中には國家的精神は殆ど形を見せてはゐないが、その部分が全體として統一される過程に、又統一體の上に國家的精神が見られるのである。更にこれを具體的に考へて見よう。

言ふまでもなく、「古事記」には種種の英雄が活躍し、其等の英雄を中心として事件が展開するのであるが、只一人の英雄によつて統一されてゐるのではない。又一人の英雄によつて行はれる種種の事件も別別であつて、必然的な統一をそこに見出すことは出來ないのである。だから、一一を分解し解剖して行けば、其等の英雄の姿さへも實在の上からは影の淡くなる場合もある。併し、その別別となつた所謂遊離說話を組織立てる上に、神――それは國家の最高理想としての神が中心となつてゐる處に、全體が渾然として統一されてゐるのである。卽ち我我が「古事記」の統一性を求めて進んで行けば、必ずそこに神があり、國家的精神が中心となつてゐるのを見るのである。平家物語」を繙けば、その一篇には樣樣な戰鬪や、哀別離苦や、榮枯盛衰の事件などが點出されてゐるが、それを深く追求して行けば、世のはかなさと欣求淨土とに統一されてゐるやうに、「古事記」の樣樣な相も、推詰めて行けば、この神、國家の最高理想としての神へ到達するのである。

さうして、この最高理想としての神は絕對の力を持つものであるが、その力は元より單なる武力ではなく、愛の精神を一方に具へた力である。英雄といふ概念を見ても、單なる武力の持主ではなく、愛がその一面に存するのである。八岐大蛇を征伐した素戔嗚尊も、一方には奇稻田姬との濃やかな愛情を有してゐる。日本武尊にしても、不正なる大碓命を殺されたり、單身敵の陣營に入られたりした勇者でありながら、夫のために命を捨て、荒れ狂ふ海中に身を投じた弟橘姬に對しては、「あづまはやし」と無限の感慨を寄せて居られる。又その死に臨まれては、大和の春を回想し、生あるものを讃美して、高らかに歌つて居られるのである。大國主命が出雲民族の偉大なる統一者である他の半面に於て、情味の豐かな神であつたことは、「古事記」の極力描いてゐる

所である。かく力と愛との所有者であつてこそ、理想的な英雄であり、神であるのである。更に言ひ得るならば、劒と玉と鏡とを以て代表されるところの、強い武力と、なごやかな情愛と、明かな叡智とこそは、英雄と神との最高の理想であり、又國家の最高の理想である。この最高理想に向つて進むところに、國家の生命は永遠であるのである。さうして、「古事記」は、この力と、愛と、叡智との現れである、人間の最高理想としての神を求めてゐるところに、その窮極の精神があり、理想があり、統一性があると考へられる。それこそは國家の最高理想であると共に、人間の最高理想である。この最高理想を求めて行くところに、國家も人も一體となる。かうして、我我は「古事記」の中から神と英雄と國家と人とが結び著いた、人間の永遠なる姿を見ることが出來るのである。この人間の永遠の姿こそ、單純なる童心に通ずると共に、無限の複雜さを含んでもゐるのである。

而も「古事記」は敍述するのみで、決して說くことをしてゐないのである。事件を語つてはゐるが、これに就て主觀的な解釋も詠歎も主張も現してゐないのである。そこに形態としての敍事文學的な性質が見られるが、その語られた中からあらゆるものを酌取つて明かにするのが、卽ち「古事記」の研究過程である。少年の頃、我我が多大の感興を覺えた素戔嗚尊や大國主命や日本武尊などに對しては、やはり今日でも同じやうな感興を起すのであるが、同時にそこから無限の問題が湧きでて來るのである。さうして、その間から「古事記」の統一性を摑むことは、やがて國家の最高理想としての神を理解することであり、同時に人間としての最高理想をも摑むことであると思はれるのである。（久松潛一著「上代日本文學の研究」による）

久松潛一　國文學者。東京帝國大學文學部出身。現に同大學助教授・日本女子大學教授。

（一）「追放されて」の意。
（二）島根縣第一の大川。源を船通山に發し、流れて宍道湖に注ぐ。
（三）「たづねもとめる」の意。
（四）今の島根縣簸川郡古志村及び布智村の邊。
（五）眞赤な酸漿。

二　須賀宮

かれ、（一）やらはえて、出雲の國の肥（二）の河上なる鳥髮のところに降りましき。このをりしも、箸その河より流れ下りき。ここに、須佐之男命その河上に人ありけりと思ほして、（三）まぎ上り出でましかば、翁と嫗と二人ありて、稚女を中に置ゑて泣くなり。すなはち、「汝等は誰ぞ。」と問ひ給へば、その翁、「吾は國つ神大山津見神の子なり。あが名は足名椎、妻が名は手名椎、女が名は櫛名田比賣と申す。」と申す。又「汝の泣く故は何ぞ。」と問ひ給へば、「あが女は本より八稚女ありき。ここに高（四）志の八俣遠呂智なも、年毎に來て食ふなる。今それ來ぬべき時なるが故に泣く。」と申す。「その形は如何さまにか。」と問へば、「それが目は赤（五）加賀智なして、身一つに頭八つ、尾八つあり。又その身に蘿また檜・杉生ひ、その長さ谿八谷、峽八尾を亙りて、その腹を見れば、ことごとに何時も血あえただれたり。」と申す。かれ、速須佐之男命、その翁に、「これ汝の女ならば、あれに奉らむや。」と詔り給ふ。「かしこけれど、御名を知らず。」と申せば、「あは天照大御神の伊呂勢（六）なり。かれ、今天より降りましつ。」と答へ給ひき。ここに、足名椎・手名椎の神、「しかまさば、かしこし、奉らむ。」と申し

（六）ここでは「弟」の意である。

毎年來喫。今其可來時故泣爾問其形如何答白彼目如赤加賀智而身一有八頭八尾亦其身生蘿及檜榲其長度谿八谷峽八尾而見其腹者悉常血爛也。此謂赤加賀知者。今酸漿者也。爾速須佐之男命詔其老夫是汝之女者奉於吾哉答白恐亦不覺御名爾答詔吾者天照大御神之伊呂勢者也。自伊下三字以音故今自天降

○古事記上

古版古事記

(一)齒の數の極めて多い櫛。
(二)極めてよく釀した酒。
(三)刀の切味のよい形容。

かれ、速須佐之男命、乃ちその稚女を湯津爪櫛にとりなして、御美豆良にささして、その足名稚・手名椎の神に告り給はく、「汝等は八入折の酒を釀み、又垣を作り廻し、その垣に八つの門を作り、門毎に八つの棧敷を結ひ、その棧敷毎に酒船を置きて、船毎にその八入折の酒を盛りて待ちてよ。」と告り給ひき。かれ、告り給へるままにしてかく設け備へて待つ時に、その八俣遠呂智、まことに言ひしがごと來つ。乃ち、船毎におのが頭を垂れて、その酒を飲みき。ここに飲醉ひて留まり伏し寢たり。乃ち速須佐之男命その御佩かせる十拳劍を拔きて、その蛇を斬りはふり給へば、肥の河血になりて流れき。かれ、その中の尾を斬り給ふ時、御刀の刃かけき。怪しと思ほして、御刀の先もちて刺し割きて見そなはししかば、都牟刈の大刀あり。かれ、この大刀を取らして、怪しき物ぞと思ほして、天照大御神に申し上げ給

(四)島根縣大原郡海潮村字諏訪の地。

太安麻呂 學者。文武天皇に仕へて民部卿に任ぜられ、又勅を奉じて「古事記」二卷を撰した。養老七年（一七三）歿。

ひき。こは草那藝の大刀なり。

かれ、ここをもて、その速須佐之男命、宮造るべきところを出雲の國にまぎ給ひき。ここに須賀(四)のところに到りまして、詔り給はく、「あれここに來ましてあが御心すがすがし。」と詔り給ひて、其處になも宮造りてましける。かれ、其處をば今に須賀とぞいふ。この大神、始め須賀の宮造らししし時に、そこより雲立ち騰りき。かれ、御歌よみし給ふ。その御歌は、

夜久毛多都伊豆毛夜幣賀岐都麻碁微爾夜幣賀岐都久流曾能夜幣賀岐袁

ここに、その足名椎神を召して、「汝はわが宮の首たれ。」と告り給ひ、また名を稲田宮主須賀之八耳神とおほせ給ひき。

（太安麻呂撰「古事記」による）

三　倭建命の東征

ここに天皇(一)また頻きて倭建命に「東の方の荒ぶる神、またまつろはぬ人どもをことむけやはせ。」と詔りたまひて、吉備臣らが祖、名は御鉏友耳建日子(二)を副へて遣はす時に、柊の八尋矛(三)を賜ひき。

かれ、命を承りて罷り出でます時に、伊勢の大御神の宮に參りまして、神のみかどををろがみたまひて、罷ります時に、御姨倭比賣命草薙劍を賜ひ、また御囊を賜ひて、「若しとみの事あらば、この囊の口を解きたまへ。」となも詔りたまひける。

かれ、東の國に出でまして、山河の荒ぶる神またまつろはぬ人どもを悉にことむけやはしたまひき。爾に相模の國に到りませる時に、その國造詐りて白さく、「この野の中に大沼あり。この沼の中に住

(一)景行天皇。
(二)「重ねて」「引續いて」などの意。
(三)服從しない人人。
(四)「平定せよ」の意。

める神、いたくちはやぶる神なり。」と白す。ここに、その神をみそなはしに、その野に入りましつれば、その國造その野に火をなも著けたりける。かれ、欺かえぬと知し召して、かの御姨倭比賣命の賜へる御囊の口を解きあけて見たまへば、その裏に火打ぞありける。ここに、先づその御刀もて草を刈りはらひその火打をもちて火を打出で、向ひ火を著けて燒きそけて還り出でまして、その國造どもを皆斬滅ぼし、乃ち火をつけて燒きたまひき。かれ、そこをば今に燒津とぞいふ。

それより入りいでまして、走水の海を渡ります時に、そのわたりの神、波を立てて、御船たゆたひて、え進み渡りまさず。ここに、その后、御名は弟橘比賣命白したまはく、「妾御子にかはりて海に入りなむ。御子はまけの政とげて、かへりごと奏したまふべし。」と白して、海に

(五)却けること。
(六)今の靜岡縣志田郡燒津町であらう。但し、ここは國は相模ではなくて駿河である。
(七)今の浦賀海峽といふ。
(八)倭建命をさす。
(九)任命された務。
(一〇)復命。

入りまさむとする時に、菅疊八重、皮疊八重、絁疊八重を波の上に敷きて、その上におりましき。ここに、その荒波おのづから和ぎて、御船え進みき。かれ、その后の歌はせる御歌、

（一）さねさし相模の小野に燃ゆる火の火中に立ちてとひし君はも

かれ、七日ありて後に、その后の御櫛海邊に寄りたりき。乃ちその御櫛を取りて御陵を作り治め置きき。

それより入りいでまして、悉に荒ぶる蝦夷どもをことむけ、また山河の荒ぶる神どもをやはして還りのぼります時に、足柄の坂本に到りまして御粮きこし召す處に、その坂の神白き鹿になりて來立ちき。かれ、その御食しのこりの蒜の片端もて待ち打ちたまひしかば、その目にあたりて打殺さえたりき。かれ、その坂に登り立ちて

（一）相模の枕詞。

（二）ねもごろに歎かして、「阿豆麻波夜。」と詔りたまひき。かれ、その國を阿豆麻といふなり。

即ちその國より越えて甲斐に出でて、（三）酒折宮にましましける時に、歌ひたまはく、

（四）にひばり筑波を過ぎて幾夜か寢つる

ここに、その御火燒の翁、御歌を繼ぎて歌ひけらく、

（五）かがなべて夜には九夜日には十日を

ここをもて、その翁を譽めて、東の國造にぞなしたまひける。

その國より信濃の國に越えまして、信濃の坂の神をことむけて、尾張の國に還り來まして、尾張の國造の祖、美夜受比賣の許に入り坐しつ。その御刀の草薙劍をその美夜受比賣の許に置きて、伊吹の山の神を取りに出でましき。

（二）「ねんごろに」と同じい。

（三）今の山梨縣西山梨郡里垣村の酒折八幡宮が宮址であると傳へられる。

（四）筑波の枕詞。

（五）「日數積りて」「日に日を重ねて」などの意。

ここに詔りたまはく、「この山の神は徒手にただに取りてむ。」と詔りたまひて、その山に登ります時に、山のべに白き猪逢へり。その大きさ牛の如くなりき。かれ、言擧して詔りたまはく、「この白き猪になれる者は、その神の使者にこそあらめ。今(一)とらずとも、還らむ時にとりてむ。」と詔りたまひて登りましき。ここに、大氷雨を降らして倭建命を打惑はしまつりき。かれ、還り下りまして玉倉部の清水に到りて憩ひませる時に、御心やや覺めましき。かれその清水を居覺の清水とぞいふ。

そこより發たして、當藝野の上に到りましし時に詔りたまへるは、「あが心つねは空よりも翔り行かむと念ひつるを、今あが足え歩まず。(二)當藝斯の形になれり。」とぞ詔りたまひける。かれ、そこを當藝といふ。そこよりやや少し出でますに、いたく疲れませるに因りて、御杖をつかしてややに歩みましき。かれ、そこを杖衝坂といふ。(三)尾津の前の一(四)つ松の許に到りませるに、先に御食せし時、そこに忘らしたりし御刀失せずて猶ありき。かれ、御歌よみしたまはく、

尾張にただに向へる尾津の前なる一つ松吾兄を一つ松人にありせば太刀佩けましを衣著せましを一つ松吾兄を

そこより出でまして三(五)重の村に到りませる時に、また「あが足三重の勾(六)なして、いたく疲れたり。」と詔りたまひき。かれ、そこを三重といふ。

そこより出でまして能煩野に到りませる時に、國しぬばして歌ひたまはく、

大和は國のまほろば(九)たたなづく青垣山こもれる大和しうるはし

(一) 殺さずとも。
(二) 船尾の舵機。
(三) 三重縣桑名郡多度村及び古濱村の古名。
(四) 前記古濱村と戸津村との境にある八劔宮は卽ち尾津神社で、その地に劔掛松の跡といふものを傳へてゐる。
(五) 三重縣三重郡内部村大字采女の舊名であらうといふ。
(六) 一種の餅菓子。
(七) 三重縣鈴鹿郡の半ばを占めて、南北に連なる廣原である。
(八) 中央の秀でた處をさして言ふ。
(九) 重疊してゐること。

また、

命の全けむ人はたたみこも平群の山の熊樫が葉を髻華に挿せその子

この歌は思國歌なり。又歌ひたまはく

はしけやし吾家の方よ雲居たち來も

こは片歌なり。この時、御病にはかになりぬ。ここに御歌して、

をとめの床の邊にわが置きし劒の太刀その太刀はや

と歌ひ畢へて、乃ち神あがりましぬ。かれ驛使を奉りき。

ここに、倭にます后たち、また御子たち、諸〻下り來まして、御陵を作りて、そこの那豆岐田にはらばひもとほりて、御音泣かしつつ歌ひたまはく、

なづきの田の稻幹に稻幹に這ひもとほろふところづら

（一）平群の枕詞。
（二）「愛らしい」「美しい」などの意。
（三）「よ」は「より」の意。
（四）「危篤」の意。
（五）御陵の周圍の田。
（六）這ひめぐる。
（七）蓴菜科に屬する蔓草の名。
（八）進みゆくことの困難なことをいふ。
（九）「足で歩いて行くことかな」と歎いたのである。
（一〇）「うみが」は「海」に同じい。
（一一）生えてゐる草。
（一二）行きもやられずためらふこと。
（一三）昔の志紀郡志紀郷で、即ち今の長吉村・三本木村に當る。

ここに八尋白千鳥になりて、天に翔りて濱に向きて飛びいましぬ。かれ、その后また御子たち、その小竹の刈杙に御足切り破るれども、その痛きをも忘れて泣く泣く追ひ出でましき。この時の御歌、

淺小竹原腰なづむ空は行かず足よ行くな

又その潮に入りて、なづみ行きましし時の御歌、

うみがゆけば腰なづむ大かはらのうゑ草うみがはいさよふ

又飛びて、そこの磯にゐたまへる時の御歌、

濱つ千鳥濱よは行かず磯づたふ

この四歌は皆その御葬に歌ひたりき。かれ、今にその歌は天皇の大御葬に歌ふなり。

かれ、その國より飛び翔りいまして、河内の國の志幾に留まりま

しき。かれ、そこに御陵を作りて鎮まりまさしめき。卽ち、その御陵を白鳥の御陵とぞ謂ふ。然れども、またそこより更に天翔りて飛びいましぬ。（太安麻呂撰「古事記」による）

第五學年第三學級

瀨羅俊一所有

新撰國語讀本 昭和二版 卷十 終

昭和六年九月十九日印刷
昭和六年九月二十三日發行
昭和七年二月二日訂正印刷
昭和七年二月六日訂正發行

不許複製

新撰國語讀本昭和二版（全十册）

定價

卷一・二	各六拾五錢
卷三・四	各六拾貳錢
卷五・六	各五拾六錢
卷七・八	各五拾參錢
卷九・十	各五拾錢

編者 佐々政一
補修者 武島又次郎
補修者 笹川種郎
補修者 杉敏介

發行兼印刷者 東京市神田區錦町一丁目十番地 株式會社明治書院 取締役社長 三樹退三

發行所 東京市神田區錦町一丁目 振替貯金口座東京四九九一番 株式會社明治書院 電話神田(25)二六九五・二六九六